筑波大学新聞

第281号
編集責任
筑波大学新聞
編集委員会
委員長 荻野祥三
TEL：029(853)2040・6699
E-mail
shinbun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp
月 刊

発 行 所
筑 波 大 学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

本学サイバニクス拠点

デンマーク工科大学と提携

福祉とロボット技術の融合

HALの欧州展開目指す

HALを装着したモデルを前に講演する山海教授

本学のグローバルCOEのサイバニクス拠点は、人支援ロボティクス技術の研究、技術者教育について、デンマーク工科大と提携する。これに伴い、先月1日にデンマーク大使館（東京・渋谷区）で提携協定の締結式が行われた。

提携の中心となるのは、HALの開発で知られる山海嘉之教授（知機）が代表を務める同拠点と、デンマーク工科大のプレイウェアセンター。今後、介護やリハビリなどの現場でロボット技術の有効な利用法を共同で研究する。

サイバニクス拠点は、脳科学や医学、ロボット工学などの複合領域の研究を目的に、2007年に設立された。デンマーク工科大はブロック玩具「LEGO」の開発などで知られ、プレイウェアセンターでは、エンターテインメントとリハビリテーションを融合させ、患者が楽しみながらリハビリを出来る技術、「プレイウェア」の研究を行っている。

山海教授は先月24日にイーアスつくば内のサイバーダインスタジオで行われた記者会見の中で「福祉や医療にエンターテインメントを加える事で、人に心理面からも訴えかけることが出来る」と共同研究の意義を語った。◇

山海教授が代表取締役を務めるサイバーダイン株式会社（本社＝つくば市学園南）は、デンマークでHALの実証試験を始める。オランダに設立された同社の事務所とあわせて、HALの欧州展開を目指す。欧州展開の拠点は現在選定中で、近く1カ国に絞られる見通しだ。

日本国内では福祉用HALのレンタル事業が開始されており、11月末には50台ほどのHALが生産され、全国の医療、福祉施設などに貸し出されるという。（5面に関連記事）

本学発ベンチャー企業

iPhoneのアプリ開発

ギターの演奏味わえる

本学生が立ち上げたベンチャー企業、ニューフォレスター（本社＝つくば市吾妻）が、ギター演奏を疑似体験出来る携帯電話向けソフトを、本学の浜中雅俊講師（知機）と共同で開発した。本ソフトは米アップル社の「iPhone」向けアプリケーションとして、先月1日から、日本、アメリカなど世界77カ国で無料配信されている。

ソフト名は「shake Guitar」。浜中講師の研究室が開発した、ギター演奏などのメロディを自在に変更出来る「メロディモーフィング」という技術を活用した。iPhoneを振ることでメロディを調整、実際にギターを演奏しているような感覚を味わうことが出来る。

iPhoneに搭載された加速度センサーを利用することにより、激しく振ると複雑なソロ演奏を、ゆっくり振ると穏やかな伴奏を演奏することが可能だ。今後は利用件数や反響を見て、楽曲数の増加やiPhone以外の携帯電話機種での配信も検討する。

浜中講師は「音楽初心者でも音楽をコントロールして楽しめるシステムを、今後も探求していきたい」と語った。◇

ニューフォレスターは2005年に設立。星野厚さん（CS4年）が代表取締役を務める。

パソコン向けソフト開発を始め、携帯用アプリを手掛けている。iPhoneに用のアプリには、今回開発されたアプリのほかにDJアプリ「iPJ」がある。

アルミ風船デザインソフト

描いた形が風船に

小学生でも簡単操作

オリジナル風船を膨らませる小学生

本学の三谷純准教授（CS）と古田陽介さん（CS後期2年）らが、アルミや紙などの素材から風船を自由にデザイン出来るソフトを開発した。先月10日には、科学未来館（東京・江東区）でワークショップが行われ、8組の親子がさまざまな形の紙風船を作って楽しんだ。

ソフトは古田さんが中心となって制作を進めた。アルミや紙などはゴムと違って伸びない素材のため、空気を入れて膨らませると必ずどこかにしわが生じる。そのため、しわが出来る場所を予測して型紙を作るのが難しいとされていた。高度な有限要素法（シミュレーション）とタッチペン入力による形のデザインを組み合わせることで、薄く伸縮性の乏しい素材による、イメージ通りの立体設計を可能にした。

今回のワークショップで初めて実用され、小学生でも簡単に使えることを実証した。コンピュータの画面上で作りたい形をタッチペンで描くと、膨らませた後のしわを考慮した型紙が出来る。同じ形の2枚の型紙を貼り合わせ、ストローで空気を入れると細かな特徴が増幅され、デザインした風船が完成する。

製作者の古田さんは、「今後は簡単に洋服の型紙を作るなど、応用事例を増やしていきたい」と語った。

台風接近

全学で休講

風雨激しく

台風18号の接近により先月8日、本学筑波キャンパスで一斉休講となった。

非常に強い台風18号が接近しつつあり、長時間にわたる暴風雨と公共交通機関の運休等が予想された。そのため本学は授業を一斉休講とした。教職員についても、公共交通機関の運行状況等により、特別休暇を認めることとした。

台風18号は8日早朝東海地方に上陸後、本州を縦断した。つくば市周辺も8日未明から暴風雨に見舞われた。また、土浦市と龍ヶ崎市で竜巻が発生し、重軽傷者を出した。

ノーベル博物館長来学

先端研究に見入る

産学リエゾンセンターで

ノーベル博物館長でスウェーデン王立科学アカデミー会長のリンドクヴィスト氏と日瑞基金事務局長のフリートウッド氏が先月2日、本学産学リエゾン研究センターを視察した。

同センターでは、山海嘉之教授（知機）から「サイバニクス：人・機械・情報系の融合領域」について説明が行われた。両氏はロボットスーツHALの実演を熱心に見ていた。

リンドクヴィスト氏らは、同日つくば国際会議場で行われた講演会に参加するため来日していた。

つくば歳時記

今年は天気に恵まれた雙峰祭。会場の一角で、ストリートダンスサークルREAL JAMが熱いパフォーマンスを見せた。（松美池ステージで）（撮影・篠崎真希＝国際総合学類）

紙面から

シンポジウム OBらが中国の諸相語る 2
メディセン 学生がミニテーブル作成 5
関根麻里さんがトークショーのゲストに 5
秋季リーグ 女子バレー部2年ぶりの優勝 8
全日本学生柔道 3人が優勝果たす 9
第35回雙峰祭 晴天下4万人来場 11
特集 6,7 T－ACTで変わるあなたの学生生活
ミニ特集 3 未知の世界を切り開け! JAXAと目指す宇宙

筑波おろし

風が吹く度に枯れ葉が舞い落ち、自転車その上を通る度にザクッ、ザクッと音がする。そんな秋のキャンパスは、しみじみ哀愁漂うものがある。先日、枯れ葉の中を不安そうに歩き回る黒髪の高校生を見た。推薦入試の受験生であろうか▼ふと、私の好きな昭和歌謡を思い出した。♪フォークダンスを手に取れば、黒髪が甘く匂う－舟木一夫「高校三年生」の一節だ▼私も3年前の高校3年生の時は黒髪だった。ちょうどこの時期に彼らと同じく、広大な筑波のキャンパス内をさまよった記憶がある▼入学当初、厳しい校則から解放され、思いのまま自由な髪形に出来ることに歓喜を覚えたのを今でも忘れない。しかし、3年間守り続けてきた茶髪も、また黒髪に戻す時期がやってきた▼「筑波大生になったら、嫌でも乗ることになるんやな。受験の帰り道。当時、開通したばかりのTXから眺めた、稲刈りを終えたばかりの常陸の風景。昨日のことのように思い出される▼走馬灯のように過ぎ去った3年の歳月。今度は、学ランの代わりにリクルートスーツを身にまとい、広大なキャンパスではなく、広大な都心のビル群の中をさまよう自分がここに居る。来年はどんな気持ちで、このキャンパスを眺めているのだろうか。枯れ葉は私を「原点」に帰らせてくれる。

シンポジウム「日本と中国・GDP逆転の衝撃」

OBが中国の諸相を語る

各分野で第一線の知識提供
キャリア支援の役割も

昨年の中国の名目GDPは、日本に次いで世界3位。それが年内にも日本を超えて世界2位になる勢いだ。その中国に駐在した経験を持つ、各界の第一線で活躍中の本学卒業生が参加するシンポジウム、「日本と中国・GDP逆転の衝撃」が14日午後、本学学内で開催される。主催する社会学類が来年度から開催するOB・OG連携講座、「21世紀の中国＝現代中国の諸相」に向けてのプレイベントだ。

シンポジウムには新聞社、メーカー、金融など各分野のOB・OG6人が参加、存在感を増す中国の諸相について語る。

会場は本学第一エリア・1H101教室。午後2時から5時まで。入場無料。対象は本学生、教職員と留学生。地域住民にも参加を呼び掛けている。

社会学類は平成18年から、マスメディア各界で活躍する人々を講師陣に招く「青木彰記念講座・ジャーナリズムとメディアの現在」を企画・運営してきた。来年度開講の「21世紀の中国」は、このノウハウを生かし、第一線の知識を学生に提供する。OB・OGの話を聞くことで学生のキャリア支援の役割も果たすことになる。

また、本学はグローバル30拠点化を進めており、今後増加する留学生の多くはアジア圏、とりわけ中国からの学生と予想される。留学生には自国が日本人にどう理解されているかを知ってもらう狙いもある。

学生はキャリアに関する講義への関心が高い

「21世紀の中国＝現代中国の諸相」は、平成22年度1学期開講予定。東一真読売新聞元北京特派員の「中国経済の変貌」から始まり、人事労務管理、自動車、鉄など各分野の中国での生産活動。金融制度、映像文化と多方面にわたる。

日本人向け（金4限・日本語による講義）と留学生向け（金6限・中国語と英語による講義）の2種類が開講予定。前者は全学群対象。後者は社会・国際学群グローバル30英語コースを対象としているが、意欲があれば誰でも受講出来る。

シンポジウムと「21世紀の中国＝現代中国の諸相」講座話題人の土井隆義教授（国共）は、「第一線で活躍するOB・OGの話を聞くことで、キャリア支援にもなる。留学生対象の講座により、グローバル30の拠点化にも寄与出来る」と意気込みを語った。

つくば市総合防災訓練

本学で初めて開催
ヘリによる救出搬送も

本学を会場として、平成21年度つくば市総合防災訓練が9月27日、開催された。本学が会場となったのは今回が初めて。一般市民を含む約600人が参加した。

訓練は午前9時に始まった。つくば市を震源とする直下型地震が発生、市内では震度6弱が記録され、家屋の倒壊などの被害が出たことを想定。避難誘導や住民への広報、ライフラインの復旧、ヘリコプターによる被災者の救出搬送などの訓練を実施した。

本学からは職員39人が参加。避難訓練、応急救護および初期消火訓練を行った。本学附属病院も毎年参加しており、今年は水谷太郎教授（疾医、救急・集中治療部長）を中心とする看護師を含む5人が、応急救護とトリアージ（治療優先順位の選別）の訓練を実施した。

この訓練はつくば市が主催し、防災活動の習熟や市民の防災意識の高揚、関係機関の協力体制の強化などを目的として毎年行われている。

第12回ホームカミングデー

卒業生ら再会果たす

卒業後20年となる昭和63年度卒業生（医専は平成2年度）を本学に招待するホームカミングデーが、先月11日、大学会館1階レストランプラザで開催された。卒業生や家族、当時の教員など総勢約280人が集い、軽食や飲み物を囲みながら当時の思い出などを語り合った。

冒頭のあいさつで山田信博学長は、「筑波大生には何かプラスアルファを主張し、日本をリード出来るような人材になってほしい。そのためにも、国際競争力や存在感のある、学術・教育研究の拠点大学を目指し改革を続けていきたい」と語った。

卒業生代表のあいさつでは、思い出の言葉集と題し、「二の矢高速・一の矢カーブ」など、当時流行した筑波大生ならではの単語の数々が披露され、会場からはどっと笑いが起こった。

農林学類を卒業した鬼丸信乃さんは「もう20年もたったのかという驚きもあり、同時に懐かしい」と語った。また、基礎工学類を卒業した松本洋一さんは、「ずっと楽しみにしていた。子供たちに母校を見せる機会が出来て良かった」と嬉しそうに語った。

会場は本学ブランドの日本酒「桐の華」も振る舞われた。また、当時のつくばの様子がフォトスライドショーとして映し出され、思い出に浸る様子が多く見られた。

軽食を囲みながら会話を楽しんだ

グローバル30

ホームページ開設
奨学金の説明も

本学のホームページ内に、グローバル30（国際化拠点整備事業）のホームページが先月8日に開設された。また同月15日には英語版の公開も始まった。ホームページには平成22年度以降新規に設けられる英語プログラムの紹介、留学生の受け入れ達成目標、留学生への支援などを掲載。トップページのイラストには、日本人学生と外国人学生が仲良く並んでいる。コンテンツは「グローバル30とは」や「英語プログラム」など。グローバル30の丁寧な説明から、どんな英語プログラムがどの学群、研究科で開設するのかも掲載されている。「留学生への支援」のページでは、学生宿舎や奨学金の相談、キャリア支援についても詳しく説明されている。

問い合わせ＝koryuka@sakura.cc.tsukuba.ac.jp（国際部国際企画課、グローバル30担当）

英語読み上げ算

聞き取る力と計算力競う

伝統的な計算習具のそろばんと英語を組み合わせた「英語読み上げ算」の第5回茨城大会（主催＝英語読み上げ算教育協会）が先月4日に本学で開催された。小学1年から大学1年までの約100人が参加し、熱戦を繰り広げた。

「英語読み上げ算」では、英語で読み上げられる数字を聞き取り、そろばんで計算を行う。県立並木中等教育学校2年の石井愛里さんが優勝、つくば市立吾妻中1年の後藤武尊さんが準優勝となった。

北條 仁士氏（ほうじょう・ひとし＝本学准教授）10月24日に死去、59歳。喪主は妻・幸子さん。

1973年広島大学理学部卒。78年理学博士、同大助手。87年本学物理学系助教授。

澤口 重徳氏（さわぐち・しげのり＝本学名誉教授）10月7日死去、82歳。喪主は妻・彰子さん。

1954年東京大学卒。60年同大医学博士、同年同大助手。65年国立小児病院厚生技官、66年同院外科医長。77年本学臨床医学系教授、88年副学長、90年退職、名誉教授。

菅平高原実験センター75周年

記念式典と祝賀会行われる
初の自然林一般公開も

本学のフィールド科学研究施設である菅平高原実験センター（長野県上田市）が先月12日、創設75周年を迎えた。これに先立ち、4日に同センターの一般公開が、8日に記念式典がそれぞれ行われた。

同センターの一般公開では、通常は非公開としている同センターに上田市民など123人が訪れ、菅平高原の自然及び環境科学に関連する講演や、同センターの施設及び行っている研究の紹介が行われた。保全のため非公開としている構内の自然林なども、初めて一般に公開した。

8日には、同センターに隣接する「サニアパーク菅平」（長野県上田市）で同センター創設75周年記念式典と祝賀会が地元の篤志家や関係者を招いて行われた。本学からは、山田信博学長や同センターに関係する教職員が出席した。

◇

同センターは冷涼な高原地帯の生物や地理を研究する目的で、1934年10月12日に東京文理科大学附属菅平高原生物研究所として開設。本州中央部の標高約1300メートルの高冷地にあり、生物科学、地球科学、農学などの自然環境に関連する教育・研究の場として利用されている。

昆虫標本を見学する山田学長一行

留学生大使講演会

ウズベク知って自国を伝える

茨城県親善留学生大使を務めるウズベキスタン出身のムラドワ・エーラさん（国日1年）が9月26日、日立市の女性センターで「ウズベキスタンを知ってください」と題して講演した。国際ボランティアネットワーク「さくら」（横田寿子代表世話人）が主催し、日立国際交流協議会と日立市教育委員会が後援した。

同講演会は、ムラドワさんが親善大使の交流会で「さくら」の横田さんに誘われたことがきっかけ。

質疑応答では多くの質問が挙がった。「日本の好きな忍と嫌いな忍は何か」との質問に「ウズベキスタンと違い、時間を守るところが好き。嫌いなところは、外国人は英語を話すと思われ、英語で話し掛けられること」と答えた。

今回の講演会についてムラドワさんは「写真を見てもらい、自分の国（ウズベキスタン）に興味を持ってもらえたら嬉しい」と話した。

筑波大学アイス

大腸菌群を検出
回収・廃棄進める

「筑波大学アイスクリーム」を販売している本学と紫峰会及び同アイスクリームを製造している有限会社北斗の会（本社＝かすみがうら市）は、先月6日、同アイスクリームから大腸菌群が検出されたと発表した。大腸菌群の検出を受け、紫峰会はつくば保健所に、北斗の会は土浦保健所に、それぞれ届出を行うとともに、同アイスクリーム4種類全ての販売を中止し、自主回収を行い廃棄処分とすることを発表した。検出された製品は、「筑波大学アイスクリーム黒米味95cc」「同赤米味95cc」「同ブルーベリー味95cc」「同ミルク味95cc」のの3種類。

現在のところ、同製品を食べたことによる健康被害は報告されていないという。大腸菌群は一般に自然環境に存在する微生物群であるが、食品衛生法に基づく成分規格などの基準ではそれぞれ検出されないことが定められている。またこの検査で、同ブルーベリー味に含まれる乳脂肪分量がアイスクリームと表示出来る基準に満たないことも判明した。

本学、紫峰会、北斗の会は、今後原因究明の調査を行うことにしている。

■訂正とお詫び

本紙280号2面掲載のバイオeカフェの記事において、演奏を行った団体の名前が「Euph-Tub eアンサンブル」とありましたが、「Low Brass Sounds Laboratory」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

未知の世界を切り開け！！
ＪＡＸＡと目指す宇宙

日本の宇宙開発を担う、独立行政法人宇宙航空研究開発機構、通称ＪＡＸＡ。実は本学とＪＡＸＡは、連携協力協定を締結しているなど関わりが深い。またつくば市にはＪＡＸＡの中核機関である、筑波宇宙センターが存在する。本学とＪＡＸＡの関係や、筑波宇宙センターについて調べてみると、面白い事実が見えてきた。（本紙・光安素子、雪丸千彩子＝人文学類、西川大照＝社会学類、篠崎真希＝国際総合学類、扇本剛司＝社会工学類）

筑波宇宙センター 概要

筑波宇宙センター（つくば市千現）は1972年に開設され、最新鋭の試験設備を備えた、総合的な事業所だ。緑に囲まれた敷地内に1歩足を踏み入れると、純国産ロケット「Ｈ－Ⅱロケット」が来場者を出迎え、展示室フロアでは間近に宇宙を感じることが出来る。

日本の宇宙開発の中枢である同センターには、ロケット打ち上げ時の振動や加速度、宇宙空間の真空状態や温度などの環境をシミュレートする設備が整っている。それらを用いて、人工衛星やロケットといった宇宙機の機能・性能を確認する試験を行っている。

例えば、超高真空下に宇宙機が長期間さらされると、その表面の材質はどのように劣化していくのか、といったメカニズムを解明する試験が行われている。

また、同センターは打ち上げ後の人工衛星を追跡管制するためのネットワークの拠点でもある。各地の宇宙通信所が受信したデータはすべてここに集められ、各種衛星の効率的な追跡管制を実施している。

他にも国際宇宙ステーション「きぼう」の運用管制、「きぼう」の運用に関わる宇宙飛行士のトレーニングはここで行われる。

ここまで開発や試験のスケールが大きいと、近寄りがたさを感じてしまうかもしれないが、同センターの展示室は年中無休、誰でも自由に見学することが出来る。事前に電話で申し込めば、宇宙ステーション試験棟や「きぼう」運用管制室も見学可能だ。また、毎年4月と10月には「特別公開」が行われ、毎回多くの人が訪れる。

日本の宇宙開発の根底を支える同センターは、宇宙ステーション「きぼう」の運用管理を拓き、そして市民に開かれた施設だ。ぜひ一度訪れてみてはいかがだろうか。

※施設見学に関する問い合わせ 029・868・2053

筑波宇宙センター 特別公開

筑波宇宙センター特別公開が「こちらつくば！宇宙に届けるみんなの夢」をキャッチフレーズに先月17日に開かれた。

特別公開では筑波宇宙センターの施設の公開や講演会、宇宙に関係した事柄を題材にした子供向けの実験などが行われた。

ＪＡＸＡ職員による講演会では3人の職員がそれぞれＨ－ⅡＢロケット、宇宙ステーション補給機（ＨＴＶ）、国際宇宙ステーションについての講演を行った。講演ではロケット開発での苦労話や宇宙開発における日本の役割についてなどが話され、参加者は真剣な眼差しで職員の話を聞いていた。横浜から来場した大学院生の男性は「ＨＴＶの仕組みなどについて実感がわいた。自分も宇宙についての研究をしていて、大変参考になった」と語った。

また、子供に宇宙がどのような環境であるかを説明する宇宙実験ショーも開かれた。実験では、真空とはどのような状態なのか、人工衛星はなぜ落ちてこないのか、無重力とはどのような状態なのかなどをテーマに実験が行われた。

このうち真空状態に関する実験では、真空状態のケースの中でラジコンを動かし、真空でも電波が届くことを実証したり、ケースの中にマシュマロを入れた状態で空気を抜き、マシュマロが膨張する様子を確かめたりした。

この他にも「ニュースト」からのライブ中継」という企画で野口聡一飛行士、山崎直子飛行士が参加者にメッセージを伝え、宇宙飛行士訓練設備が公開された。

真空状態でマシュマロ（中央）は倍以上に膨らむ

宇宙の謎に触れる

共同研究

本学とＪＡＸＡは、これまで宇宙航空関連の基礎・基盤技術や人工衛星のデータ利用、宇宙環境利用などに関する共同研究を実施してきた。ここでは村上正秀教授（構エネ）が行った、宇宙用多層断熱材（ＭＬＩ）に関する共同研究について紹介する。

ＭＬＩは人工衛星の断熱材に使われる、表面にアルミニュームなどを蒸着した、金色または銀色に輝くフィルムだ。このプラスチック製の薄いフィルムと薄い網を交互に10－50枚程度重ねることで、ＭＬＩは高い断熱性を発揮する。ＭＬＩの性能は「実効輻射率」という指標で測られる。

宇宙機に取り付けるためにＭＬＩには、「つなぎ合わせ」「縫製」「通気孔」などの加工がされる。宇宙用ＭＬＩは未加工のＭＬＩと比べ、断熱性能が低下することが経験的に分かっていた。しかし、実効輻射率にどの程度変化があるのかは分かっておらず、人工衛星の熱設計精度を上げるために、正確な値が必要だった。

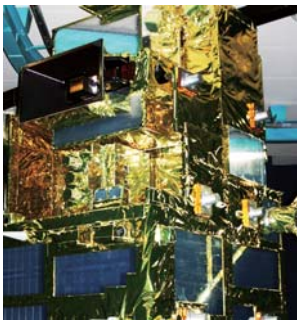
そこでＪＡＸＡは、宇宙機の熱制御について研究している、村上教授に協力を依頼。２００５年からの3年間で、本学側が計測技術の提案、実験、理論検証を担当した。これにより縫製及び通気孔がＭＬＩに及ぼす影響が解明された。

実験によって得られたデータの実用的価値が極めて高かったため、現在はデータベース化が進められている。

村上教授は「研究に参加した学生は泊まり込みも悟しまず、数日間に及ぶ実験に勤勉に取り組んだ。それによって格段に信頼性の高いデータが得られ、データベース化につながったのだと思う」と当時を振り返る。

現在、村上教授とＪＡＸＡでは、ＭＬＩの断熱性能に関する温度依存度について共同研究を行っている。

つくば市在住の小学生は「いろいろなものを見ることが出来て楽しかった。次もまた来たい」と語った。


人工衛星を覆うＭＬＩ

データベース化に貢献

文化・人文社会科学利用 パイロットミッション

ＪＡＸＡでは宇宙での芸術表現などを通じて驚きや感動を発見することを目的に、「文化・人文社会科学利用パイロットミッション」を実施している。本学からは、逢坂卓郎教授（芸術）と平山素子准教授（体育）が本ミッションに参加した。その時の様子について、2人に話を聞いた。

「墨流し水球絵画」「Spiral Top」

本学の逢坂教授は8年前からＪＡＸＡと共同で研究し、国際宇宙ステーション内の日本実験棟「きぼう」の無重力空間でうつの実験を行った。

1つ目の実験は「墨流し水球絵画」。昨年の9月に実施された。逢坂教授は無重力空間で水が球体になる特徴に注目し、刺激を与えたときに変化する造形に関心を持った。また、他の研究者が行った、球体になった水に気泡を注入する実験からもヒントを得た。

普通墨流しは、平たいトレーに張った水に墨を垂らし、水面に模様を作る。無重力状態の実験では、立体の水球表面にインクで模様をつくり、半球型の和紙に吸い取り乾燥させた。

1回目の実験では黒、青、金色のインクを垂らした。全体が真っ黒に変わり、失敗に思われた。しかし、和紙を当てると、吸い取ったのは青いインク。外部からは中心部の黒が濃く見えたが、表面には青が広がり、模様を作っていた。2回目の実験では赤、緑、黄色を用いた。こちらは水球の内部、表面にはっきりと3色のマーブル模様が出来た。

2つ目の実験は「Spiral Top」。無重力空間では空中でペンチを回すと、アーム部分と物を挟む先端部分が上下に反転しながら、アームと先端を軸に回転する。この独特な動きを応用し、ペンチに似たコマのアーム部分にライトを付けて回転させた。

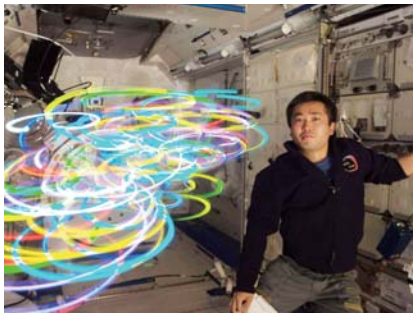
実験のきっかけは、向井千秋飛行士の「動いた物体の後に残像が見える」という言葉だった。この言葉から宇宙と地球ではものの見え方に違いがあるのではないかと思い、光の軌跡で確認しようとした。

実験は若田光一飛行士が行い、前日も宇宙と地上でモニター中継して打ち合わせた。若田さんは実験時間の他に自由時間も費やして取り組んだ。結果は成功。赤、緑、青の光が見事ならせん状の軌跡を描いた。

実験を行うに当たって、事前に無重力空間で実験出来ないことが不安だった。そこで本学の他分野の専門家から協力を得た。

「墨流し水球絵画」では阿部豊教授（構エネ）が、筑波を使って地上でも水を空中で浮遊させる装置でシミュレーションした。「Spiral Top」では磯部大吾郎准教授（構エネ）がコンピュータでシミュレーションを行い、コマを反転させるにはアームの先に錘が必要だと助言があった。阿部教授は以前から専門分野でＪＡＸＡと共同研究をしており、磯辺教授も認識を共有していた。

無重力で「美」を見直す


実験を行う若田飛行士　逢坂卓郎／ＪＡＸＡ（提供）

天女の舞を表現

「飛天プロジェクト」

「飛天プロジェクト」は、無重力状態での人の舞踊表現を通し、地球上の平和を願うものだ。敦煌の壁画や仏教美術でよく描かれる天女が空を舞う姿（飛天）をヒントに、人の動きや姿勢の新たな美しさを引き出している。芸術として細部まで工夫を凝らし、無重力ならではの浮遊環境を生かした作品となった。

その前段階として、無重力状態での実験的パフォーマンスを行ったのが、本学の平山准教授だ。２００５年10月に能登半島沖の日本海上空を飛ぶ小型ジェット機内で「飛天」の夢」という作品を撮影した。高度10000－5000メートルで上昇と下降を繰り返しながら、約20秒間の無重力状態を作りだし、暗幕が張られた機内で約10回の撮影を繰り返した。「当時は、後に宇宙ステーションで舞われるとは思ってもみなかった」と平山准教授は話す。

ジェット機内の無重力状態が解け、再度上昇する際は通常の倍の重力がかかる。平山准教授はこの時のことを「浮き上がるというより、全ての方向を失うといった感じ。一瞬自分を形作る身体の形状がわからなくなってしまうような感覚で、新鮮な体験だった」と振り返る。

本番の宇宙での舞は、若田光一飛行士により行われた。若田さんは国際宇宙ステーションの日本実験棟「きぼう」で「飛天の舞」を踊った。白い絹の衣装を身に付け、資生堂提供の化粧品でゴールドを基調としたメイクも施し、たくましい美しさを表現したという。約25分間にわたり空中で座禅を組んだり、上体を反らせるポーズなどを披露した。

前代未聞の宇宙空間でのパフォーマンスに対し、平山准教授は「若田さんの勇気、そして理解ある行動に敬意を表します。既成概念にとらわれず、あらゆる形で「ダンス芸術の素晴らしさを紹介出来ることを願っています」と語った。

反射鏡

眼鏡は経済的 手入れも簡単

大伴史緒（地球2年）

小学校4年生のころから眼鏡を掛け始めて、コンタクトレンズ（以下コンタクト）に変えたいと思ったことは今までなかった。学年が上がるにつれて目の悪い人は増えたが、逆に眼鏡を掛けている人の割合は減っていた。眼鏡はスポーツに向かない、真面目そうなイメージを変えたいという理由からコンタクトに移行する人が多かったのではないかと思う。

中学時代に、授業中に居眠りをしていたらコンタクトが眼球の裏側まで回りこんでしまったという話を聞いたりしてはすると友人がいた。それを聞いて痛そうな想像をし、自分も居眠りをする人間なので、絶対にコンタクトには変えないと決めつけていた。

私はテニス部に所属していたが、目にボールがぶつかった時にハードコンタクトだと割れてしまう、また、ソフトコンタクトは眼が乾燥しても違和感がなく、気付かないうちに張り付いて眼球を傷つける、といった噂から、コンタクトは恐ろしいものだと思っていた。

この文章を頼まれてから、今一度コンタクトについて考えた。いつもは街でコンタクトレンズショップのチラシを差し出されても断るのだが、先日受け取って見てみた。そこに載っていたのは使い捨ての物ばかりだったが、少なくとも半年で4000円はするようで、そのうえ手入れにも金がかかり、眼鏡の方がはるかに経済的だと思った。

また、鏡の前に立ち、裸眼の時と眼鏡を掛けた時を見比べて、眼鏡を掛けると眼の下のくまが上手くごまかせることに気付いた。

私が特に眼鏡にこだわる理由はないが、手入れに時間をかけたくない、化粧も面倒、という不精者には、眼鏡は魅力的だと思う。

コンタクトで快適な毎日

小川大貴（人文1年）

現在、我々、人類の視力は最も危険な状態にある。コンピュータ、テレビ、ゲーム、これらのものは、我々の生活に欠かせないものとなっている。しかし、これらは、視力低下の原因にもなっている。そのなかで、我々は視力矯正という対抗措置を生み出した。そのポピュラーな例が眼鏡とコンタクトである。では、我々はそのどちらを使ったがよろうか。

掛けるなら眼鏡 でも裸眼が一番

濱田宰（情報創成1年）

もしもの話だが、僕が目が悪くなって、コンタクトレンズと眼鏡のどちらかを付けなければならないとなったとしよう。そのとき、僕はどちらを付けるだろうか。少し考察をしてみようと思う。

眼鏡を掛けるとしよう。僕が感じていた視界は今まで比べて狭いものになってしまうだろう。眼鏡はやはり、レンズの外は見えない。

（眼鏡をかけたまま入浴するというつわものもいるが）しょうがなくレンズをふくのだけれどもすぐに曇る。そして、麺ものびる、スープも冷める。最悪だ。

しかし、コンタクトレンズならそんな心配はない。安心して、おいしいものをライフしないで食べることが出来る。

もうひとつ眼鏡のデメリットを挙げたい。それは、スポーツをする時だ。皆さんは、眼鏡を掛けたままサッカーやバスケットボール、ドッジボールをしたことがあるだろうか。私は、したことがある。これはとても怖い。ボールが目にぶつかると、ボールと眼鏡の金属部分の波状攻撃をうけると上に、眼鏡が壊れてしまう。眼鏡が壊れると精神的にも金銭的にもかなり痛い。

この悲しみは、実際にやってみると分かる。自分は帰国を余儀なくされている。リオ、サンパウロへの日本航空の直行便が経営再建計画のあおりで廃止されるというニュースに落胆した日系社会も、今回の招致決定には大いに励まされたに違いない。

日本とブラジルとの経済関係は1970年代に一部は帰国を余儀なくされている。リオ、サンパウロへの日本航空の直行便が経営再建計画のあおりで廃止されるというニュースに落胆した日系社会も、今回の招致決定には大いに励まされたに違いない。

日本とブラジルとの経済関係は1970年代に

私はコンタクトレンズ使用者である。ここでは、おそらくマイノリティーであるコンタクト人文男子学生の心の声を聞いてください。

（眼鏡をかけたまま入浴するというつわものもいるが）しょうがなくレンズをふくのだけれどもすぐに曇る。そして、麺ものびる、スープも冷める。最悪だ。

しかし、コンタクトレンズならそんな心配はない。安心して、おいしいものをライフしないで食べることが出来る。

もうひとつ眼鏡のデメリットを挙げたい。それは、スポーツをする時だ。皆さんは、眼鏡を掛けたままサッカーやバスケットボール、ドッジボールをしたことがあるだろうか。私は、したことがある。これはとても怖い。ボールが目にぶつかると、ボールと眼鏡の金属部分の波状攻撃をうけると上に、眼鏡が壊れてしまう。眼鏡が壊れると精神的にも金銭的にもかなり痛い。

この悲しみは、実際にやってみると分かる。自分は目がとても悪くならないように気を付けるのが1番である。

グラスも水泳のゴーグルも付けているとすぐに外そうとしてしまう。やはり、眼鏡は苦労しそうだ。

では、コンタクトレンズはどうだろう。まず、コンタクトレンズは小さくて透明なのでなくしやすい。そして、ハードの場合は壊れやすいし、ソフトの場合は手入れが面倒くさい。

そして何より僕が1番嫌なのは、目に異物を入れるということだ。目薬すら目に入れるのが嫌なのに、固形物を入れることは拷問でしかない。

もしどちらかを付けなければならないとしたら、眼鏡を掛けるだろう。実際僕はインドア派だし、レンズの外が見えようが見えなかろうが、何も付けないときは全部見えないのだから、仕方ない。

結局は目が悪くならないように気を付けるのが1番である。

筑波時評

輪催五開 季オ夏リ 中南米半世紀の浮沈を象徴 良好関係の日本は協力を

遅野井 茂雄

激戦となった2016年夏季五輪の招致合戦に終止符が打たれた。本学も東京招致に公式に関わっただけに落胆した向きが多かったことだろう。印象づけられたのは世界的なパワーシフトが起きているということだ。オバマ大統領という最高のエースを投入したシカゴの1回目投票での敗北は、まさに「ポスト・アメリカの世界」（ザカリア）を実感させた。

リオでの開催決定には、さまざまな見方があろうが、南米初の開催となるだけに、長年、中南米を観てきた筆者には特別の想いがある。

メキシコ市が戦後の経済発展（メキンコの奇跡）を背景に開催したのが1968年、高度成長に沸く東京に次ぐ開催であった。1960年代後半からブラジルも高成長期（ブラジルの奇跡）を迎えるわけで、本来ならそれを勢いに20世紀の内に開催されてもおかしくはなかった。ところが第一次石油危機で「奇跡」は失速、1980年代には債務危機に伴う不況と4桁のハイパーインフレに襲われる。

そうした混乱から抜け出すのが、経済の安定化と自由化を柱とした1994年以降の改革である。カルドゾ、ルラと続いた16年間のブラジル版「改革開放」の成果が「眠れる大国」を新興大国に変貌させた。遅すぎたともいえるブラジル開催は、メキシコ開催から数えて半世紀間の中南米の浮沈を象徴するものだ。

高等教育を受けない労組指導者から大統領に上りつめたルラ率いる労働者党政権（2002―）のもとで積極的な社会政策を進め、エネルギー・資源の世界需要の高まりを背景に、活発な投資と内需に支えられ力強い発展をとげてきた。

鉄鉱石に加え、海底油田の開発で輸出国へと転換する石油、大豆など世界有数の農業生産の他、小型航空機の製造やバイオエタノールなど先端的分野でも世界をリードし、金融危機後も堅調な回復基調にある。2005年にはIMFに対する債務支払いを完了し、この10月には金融危機にあえぐ加盟国支援のためIMF債1100億ドルの購入を発表、IMF純債権国となる。

ルラ政権下で特に目を引くのは、ブラジルをグローバルパワーに押し上げようとするその外交攻勢である。WTOでの途上国グループの結束、ハイチでの国連安定化ミッションの指揮など多国間外交を積極的に展開、G20など金融危機後の世界で存在感を高めている。

多極的な世界の構築を目標に、南米国家連合の結成など域内の統合推進、BRICs諸国との連携の他南米アラブ首脳会議（3月）や南米アフリカ首脳会議（9月）の開催など、中東・アフリカ諸国との協力拡大に向けリーダーシップを発揮してきた。今回のオリンピック招致の成功は南米初という条件に加え、そうした外交努力の積み重ねによるものだ。

150万人にのぼるブラジルの日系社会は昨年移住100年を迎えた。1990年以降、出稼ぎのため約32万人の日系ブラジル人が日本に滞在しているが、派遣切りなどの影響を最も強く受け、も似て再び黄金期に入った。エンブラエル社製航空機の日本参入、新日鉄のウジミナスとの合弁と高炉建設、ブラジル石油公社の南西石油の買収、地上デジタルの日本方式の採用などがそれを物語る。日本の地デジ規格の採用は「日本ブラジル方式」として、ペルー、チリなど南米諸国への採用を次々と決定づける快挙となった。

次は2014年のサッカーワールドカップの開催を控え、サンパウロとリオを結ぶ高速鉄道を日本の新幹線が落札出来るかに注目が集まる。

招致をめぐり一度取り上げた「二云々の発言（石原都知事）があった。確かにリオ開催には安全やインフラの改善など課題が大きいが、五輪開催は東京、ソウル、北京などいずれも新興大国がだった一里塚である。国連安保理改革、気候変動など地球規模の課題に対応する日本の強力なパートナーとしてのブラジルの存在に目を向け、開催への協力を惜しまない姿勢が必要であろう。

（国共・教授）

留学生の目

ソニア・リング
アンティ

この記事のテーマは「日本に来て考えたこと」である。イタリアで日本語の勉強を3年間していて、日本に来ることは夢だった。私は今年の8月に日本に来て、もう2カ月たったが、いまだに日本にいることが信じられない。

成田空港に着いたとき、日本の第一印象は良かった。なぜなら成田空港で働いている人たちが優しく接してくれたからだ。成田からつくばまでバスで行って、バスの乗客は静かに座っていた。イタリアではバスの中で電話したり、隣席の人と話したりしているから私は驚いた。

他の驚いたことは日本では車は左側通行だ。イタリアでは車は右側通行だ。そのため、自転車で左側通行に慣れることが大変だった。

「夢の日本」は驚きだらけ

つくばは自然の多い町だ。また、閑静な環境だ。筑波大学は大きなキャンパスにある。留学生センターにはいろいろな外国人がいる。オフィスの人がとても親切で、優しい。留学生は問題があったら、オフィスの人からすぐ手伝っていただく。

先生も親切な人だ。日本語の授業はいつも面白い。日本人は遅刻することがぜんぜん好きじゃない。先生は2分だけ遅かったら、「お待たせしまいました。すみません」と言う。イタリアの大学で先生はいつも10分くらい遅刻するから私は驚いた。

私は子供のころ、アニメで日本の大学のサークル活動を見たが、本当ではないと思っていた。しかし、筑波大学にいろいろなサークルがあって、たくさん友達を作ることが出来る。筑波大学の生活はとても面白くて、楽しい。留学生だったら誰でも、日本での毎日の良い思い出をこれからも大事にとっておくだろう。

（人文・文化学群特別聴講生・イタリア）※原文日本語

次号のテーマは クリスマスプレゼント です

連絡先
TEL 029・853・6699
e-mail shinbun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

筑波メディカルセンター病院

学生がミニテーブルをデザイン

設置に向け職員と意見交換

待合室を癒しの空間に

本学には「大学を開くアート＆デザインプロデュース（ADP）」という芸専開設の総合科目がある。その中にある「パプリカ」というグループの「メディカルチーム」が、筑波メディカルセンター病院（つくば市天久保）の外来患者待合室に置くためのミニテーブルをデザインしたりするために考案された。テーブルは黄緑色で、葉の形をしている。高さは椅子の座る部分とほぼ同じ程度である。デザインしたのは池田三紗さん（芸専1年）。「病院の外に植えられている樹木を病院内にも取り入れようという発想でデザインした」という。

テーブル（手前）とメディカルチームのメンバー

意見交換会では、病院側からいろいろな指摘やアイデアが出された。「黄緑色だけでなく、季節によって色を変えた方が良い」、「椅子と間違えて座ってしまう人がいるかもしれないから、何か立体的なものを上に付けた方が良い」などの意見が出た。

リーダーの谷尚樹さん（芸専1年）は「他のメンバー3人がしっかりしているから助かったものの、いろいろな苦労がある」と語る。メンバー同士、仲が良く、先月の終わり頃には、全員でハロウィンパーティーをしたという。谷さんはチームの理念を「職員、患者、チームそれぞれが協力して癒しの空間を作り上げる」としている。これからもプレゼンテーションを数回重ねる予定だ。「完成まで頑張りたい」と谷さんは話した。

行われた。

ミニテーブルは患者が飲み物を置いたり、書き物をしたりするために考案された。テーブルは黄緑色で、葉の形をしている。高さは椅子の座る部分とほぼ同じ程度である。デザインしたのは池田三紗さん（芸専1年）。「病院の外に植えられている樹木を病院内にも取り入れようという発想でデザインした」という。

意見交換会では、病院側からいろいろな指摘やアイデアが出された。「黄緑色だけでなく、季節によって色を変えた方が良い」、「椅子と間違えて座ってしまう人がいるかもしれないから、何か立体的なものを上に付けた方が良い」などの意見が出た。

リーダーの谷尚樹さん（芸専1年）は「他のメンバー3人がしっかりしているから助かったものの、いろいろな苦労がある」と語る。メンバー同士、仲が良く、先月の終わり頃には、全員でハロウィンパーティーをしたという。谷さんはチームの理念を「職員、患者、チームそれぞれが協力して癒しの空間を作り上げる」としている。これからもプレゼンテーションを数回重ねる予定だ。「完成まで頑張りたい」と谷さんは話した。

特別展　日光描かれたご威光

本学所蔵の絵図を公開

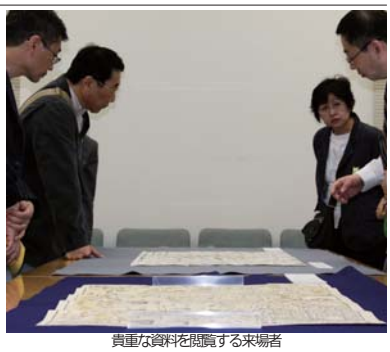
山澤講師の講演会も

本学附属図書館と人文社会科学研究科歴史・人類学専攻は共同で先月5－30日、特別展「日光　描かれたご威光　東照宮のまつり」を中央図書館貴重書展示室で催した。26日間で1334人が来場した。雙峰祭開催中3日間限定で、「日光御宮御祭礼図巻」が展示され、11日には講演会が行われた。

徳川将軍が東照宮に参拝する際の警備計画図である「日光御参詣警固絵図」のうち、本学が所蔵する18枚が公開された。江戸から日光までの各要所で、将軍が通る経路や警備にあたる役人などの配置が、色彩豊かに墨で描かれている。絵図は本学の前身校である東京師範学校が明治時代初期に購入したものだ。

栃木県から来場した石川弘司さんは「絵図に地元の様子が載っていて感心した。日光について知らかったことが分かり、貴重な資料を見られて良かった」と話した。

11日の講演会では、日光市出身の山澤学講師（歴人）が日光御参詣警固絵図について語り、「本当に美しい。絵画的で木々の一本一本まで詳細に描かれている」と絶賛した。2007年度に比較文化学類を卒業した女性は「山澤先生といえば日光。講演を聞き、改めて先生の日光への思い入れが分かった」と話した。



貴重な資料を閲覧する来場者

サイバーダインスタジオ1周年イベント

HAL披露に子供達喜ぶ

山海教授が講演

イーアスつくばは内のサイバーダイン株式会社（本社＝つくば市学園南）のショールーム「サイバーダインスタジオ」のオープン1周年記念イベントが先月24、25日に行われ、同社の代表取締役を務める山海嘉之教授（知機）が講演を行った。イベント当日は施設が無料開放され、多くの人が足を運んだ。

山海教授は漫画「鋼の錬金術師」や小説「我はロボット」などのSF作品を例に、HALについて説明。小学生時代の文集や実際の開発の様子をおさめたスライドを用いて、自身の研究者としての歩みやHAL開発の成果などを来場者に披露した。手足にHALをつけた患者が歩く映像が紹介されると、会場から驚きの声が上がった。

また、「マクロス」などのロボットアニメで知られるアニメ監督、河森正治氏とのコラボレーションから生まれた映像作品「ターゲットHALマイクロドベンチャー」のキャラクターが山海教授から紹介され、来場していた子供たちの注目を集めた。

講演後には来場者から、バッテリーでの持続時間や水中用HALの可能性などについて質問が飛び出し、山海教授と来場者がHAL体格差の問題などが挙げられ、HALの開発の実際について説明が行われた。（II1面に関連記事）

キャリア支援トークショー

関根麻里さんが語る

約220人が参加

著名人を本学に招いて対談し、中長期的な視座からキャリアを考えるきっかけを与えることを目的とした、「キャリア支援トークショー　NHK大学セミナー」が先月19日、大学会館講堂で行われた。今回はタレントの関根麻里さんとNHKプロデューサーの石原真さんを招き、関根さんが出演する番組の裏話や学生時代の思い出などについて語った。当日は学群1年生を中心に約220人が集まり、トークショーを楽しんだ。

関根さんは同じくタレントの関根勤さんの一人娘。母親の影響で幼稚園から英語に関心を持ち、ICU（国際キリスト教大）に進学した。卒業後、ディズニーランドでのアルバイトを経て、ロサンゼルスでの留学を経験。帰国

T−ACTで変わるあなたの学生生活

大学教育に時代に沿った新しい取り組みが求められている。本学では、学生の可能性と夢を引き出し実現する取り組みとして、つくばアクションプロジェクト「T−ACT」が、昨年から始動している。実際にT−ACTに関わった学生、教職員に話を聞いた。（本紙・西内彩香＝人文学類、高橋俊樹＝社会学類、宇治田輝之、隅田聖彦、根津彩香＝国際総合学類、柏雪＝社会工学類）

T−ACTとは？

日々の学生生活から生まれる、ほんの小さなアイデア。つくばアクションプロジェクト「T−ACT」はそんな学生たちの思いを実現する手助けをするために生まれた。

これまで、一般学生団体など、いわゆるサークル団体を援助する仕組みはあったしかし学生個人の「やってみたい」という気持ちをくみ上げ、その実現を手助けする仕組みはなかった。

T−ACTはこの空白を埋め、「やってみたいことがあるのに、どうすれば出来るか分からない」学生たちの学生生活を充実させるための組織だ。すでに、50以上の企画がT−ACTに持ち込まれ、その多くが実現、あるいは実現に向けて動き出しているという。

思い実現を手助け

T−ACTが対象とする企画は、数か月以内の短い期間に実現出来るもの。活動を「物」と「知恵」の面からサポートする。一方で、活動のための資金援助は得られないという点には注意が必要だ。その代わりにT−ACTでは、学生の活動に必要な資金を調達するための方法を提案するなどしている。

プランを持ち込むのは学生だけではない。T−ACTの活動に理解のある本学の教職員が自らプランを企画しT−ACTに持ち込み、学生を巻き込んで活動を行う例もある。

こうした教職員と学生が共同して新たな活動を行う考えが評価され、T−ACTは文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」（学生支援GP）に採択されている。2008年度以降、4年間は国からの補助金と本学の自己資金を合わせて、運営方法やシステムについて改良を行いながら、運営を行っていく。

2010年度以降、T−ACTは本学の自己資金のみで運営する体制に移行する予定だ。

今、実現してみたいことがあるのなら、スチューデントプラザ内、1D棟3階のT−ACTフォーラムを訪ねてはどうだろう。

T−ACTの使い方

T−ACTでは、学生立案による活動を「T−ACTアクション」教職員や、学生支援組織の立案による活動を「T−ACTプラン」と呼んでいる。

学生が活動のプランナーとなって活動を行う場合には、1人以上のパートナーと呼ばれる教職員と協力する。活動の運営は、オーガナイザーと呼ばれる共同運営者、パーティシパント（参加者）を募り、協力して行うことになる。

教職員や学生支援組織がプランナーとなっている場合は、学生はオーガナイザーまたはパーティシパントとして、活動に参加出来る。

このように、T−ACTが活動への参加に3つの形態を設けているのは、積極的な学生にはプランナーやオーガナイザーに、そうでない学生にも、まずは気軽にパーティシパントとしてT−ACTの活動に参加してほしいという考えがあるからだ。

T−ACTの活動はプランナーが企画をT−ACTに持ち込むことから始まる。活動の企画の申請に必要なのは2種類の書類「企画申込書」と「活動計画書」だけ。この時、必ずしもパートナーとなる教職員がいる必要はなく、そのまま企画を持ち込むことも出来る。

T−ACT運営会議で企画が承認されると、パートナー、オーガナイザー、パーティシパントの募集が始まる。このときに力を見せるのが、本学の充実した人材データベース（以下DB）だ。教員を検索出来る研究者総覧「TRIOS」や、T−ACTが運用している学生人材DBなどを使って、それぞれのメンバーを募集することが出来る。

活動の仲間がそろうと、アクションが開始される。活動後には、T−ACTのホームページに活動の結果が公開され、活動の認定書が発行される他、優れた活動には表彰も行われる。

同団体の町田健登さん（国総3年）は今年2月にグッジョブを初めてT−ACTに申請した。大規模な企画のため人手が必要で、多くの学生と共に夢と感動を分かち合いたかったからだ。

申請により、人を集めるためのツールを使えるようになった。T−ACTが管理する電子掲示板では、イベントスタッフ募集の情報を流すことが出来た。また学内各所の掲示板にポスターを掲示する許可も簡単に受けられた。

経費節減にも一役買った。ポスターを作成しT−ACTが所有する輪転機を利用出来たため、印刷代の節約に繋がった。天の川CPを催した際は、清掃用具などを借りることが出来、申請前より格段に経費を安く抑えられた。

信用の面でも効果があった。天の川CPの際、ポンプの貸し出しを施設部に依頼したところ、昨年に比べ迅速に対応を受けられた。またT−ACTのお墨付きがある分、学生がイベントに参加しやすくなった。

オーガナイザーを務めたゆ〜もあ副代表の大川原友樹さんは「大学に支援を受けていると思うと、責任感が出てくる」と話す。姿勢を正してイベント運営に挑めることもメリットの1つかもしれない。

またT−ACT側のスタッフの気遣いも大きな支えとなったという。イベントの度に「人は足りているか」「車は必要か」と声を掛けてもらったそうだ。

イベントを行うにはどうしても、費用が必要になる。少しでもコストを削減したいなら、T−ACTを活用することは有効だろう。

◇

グッジョブは子供たちがさまざまな職業に就き、給料としてもらえる架空の通貨「ジョブジョブ」で消費活動を体験するもの。5月に天の川CPは一時的に天の川の水を抜き、清掃するという活動（本学第三エリアと第二エリアの間に流れる水路「天の川」を夜空に浮かぶ満天の天の川が映るくらいきれいにしようとの理念で、9月に実施された。

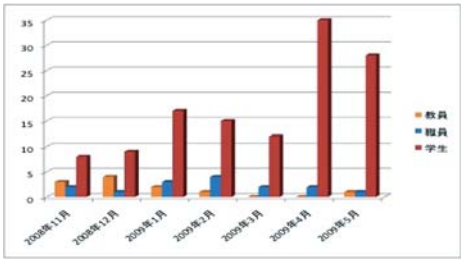
リアルRPGは子供たちがさまざまな役に就いてパーティーを組み、捕われた「お姫様」を助けるというもの。ベニヤ板で作られたダンジョンを進み、敵と戦い経験値やアイテムを得ると、成長して強くなっていく。7月に大曽根児童館（つくば市大曽根）で実施された。

天の川CPは一時的に天の川の水を抜き、清掃するという活動（本学第三エリアと第二エリアの間に流れる水路「天の川」を夜空に浮かぶ満天の天の川が映るくらいきれいにしようとの理念で、9月に実施された。

利用者に聞くT−ACT

ゆ〜もあ

学生団体「ゆ〜もあ」のメンバーは「つくろう☆文部科学省の学生支援GPに採択され、学内外から高い評価を得ているT−ACT。すでに50以上の企画が活動を経験している。何度もT−ACTを利用するリピーター」学生もいる。T−ACTで活動することによってどのような体験をすることが出来るのか。実際に活動した4つの団体に聞いた。



T−ACTが運営を開始した昨年11月から、今年5月までの利用者数の変遷。今年度に入ってから大幅に利用者数が増えており、活動が活発化している事が分かる。（データ集計・作成＝T−ACT）

T−ACT表彰式

今年度上半期に実施されたT−ACTの企画のうち、特に優秀なものを表彰する「平成21年度上半期つくばアクションプロジェクト表彰」が、先月28日に大学会館国際会議室で開催された。

最優秀賞には、牧野美咲さん（化学2年）が企画した「IBO（生物学オリンピック）折り紙交流会」が、優秀賞に町田健登さん（国総3年）が企画した「つくろう☆子供遊園地 Good Job〜夢のお仕事体験場〜」と「作ろう☆リアルRPG〜夢の宝島〜」が選ばれた。特別賞には須藤優花さん（比文3年）が企画した「留学生とともにつくる国際情報誌」が選出された。

表彰式後、牧野美咲さんは「IBOの開催を知ってすぐにT−ACTに行った。理想以上の活動ができた。またT−ACTで活動したい」と話した。

T−ACT総合科目

本学は今年度から、月曜2時限に総合科目「みんなで創ろう『つくばアクションプロジェクト』（学生生活支援室開設）」を開講している。毎学期開講で、各学期とも内容が同一の学期完結型の授業となっている。

授業は講義だけでなく、実習やグループワークも行う。学生自身が主役のアイデアを自ら企画し、それを実現するための方法を学ぶ。

今回活動を紹介した伊藤一成さん（教育2年）のように、授業を通してT−ACTに興味を持ち、プランナーとなって活動を行った例もある。

授業を受けている金岡孝浩さん（人文1年）は「初対面の人と意見交流ができる」と授業の魅力を語った。

授業は好評を得ているものの、履修者数はまだ少なく、学生生活支援室は今後も積極的な宣伝活動を行っていく。

留学生と交流

「留学生と日本人学生がサークル以外の交友関係を作れるようにしたい」「Team8−留学生と日本人学生がつくる国際情報誌−」（以下「Team8」）のプランナーの須藤優花さん（比文3年）がT−ACTに申請した理由だ。

「Team8」では、留学生と日本人学生が協力して、団体名を冠した情報誌「Team8」を作成している。10月に創刊号を発行し、現在は第2号の発行準備を進めている。

須藤さんは、昨年韓国へ1年間の交換留学を経験した。そこで、日本の大学の「サークル活動」は特殊だと感じたという。しかし、日本では海外からの留学生がサークルに入ることは少なく、日本人の友達を作るのは難しい。そこで留学生と交流出来る雑誌をつくろうと思い至ったという。

T−ACTに申請した理由は他にもあるそれは「気軽さ」だ。サークルでは、定期的に開くミーティングなど束縛が多い。「やりたいときにやりたい人が参加する形は魅力的」と須藤さんは話す。

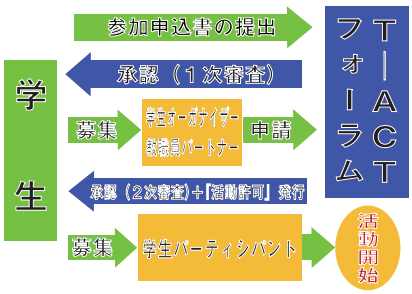
無理にミーティングを開かず、個々のメンバーの興味を優先して「Team8」の記事を書いた。

また、須藤さんらが仲介となって、留学生と日本人学生を双方に紹介する形で、人の輪も広がっていった。活動が軌道に乗るまで苦労はあったが、「最近ようやく活動が楽しくなってきた」と須藤さんは笑う。

T−ACTのメリットとは何か。須藤さんは「学生のアイディアを大切にしてくれる姿勢。また、気軽に相談出来る専任職員がいるという安心感がある」と言う。

オーガナイザー代表の草刈緑さん（比文3年）は「T−ACTに申請したことで、サークル以外の選択肢が可能になった」と話す。「Team8」の今後の活動から目が離せない。

ゆ〜もあのイベントで警察官の体験をする子供たち



少ない書類で気軽に企画を申請することが出来る点も魅力

あなたの「やってみたい」を応援する大学へ

不満をチャンスに

ワンセグ受信へ

筑波大学は最先端技術が集まった場所なのに、ワンセグが受信出来ない。そんな小さな不満から「つくば市（筑波大学）にワンセグを入れよう」という活動が始まった。

プランナーの伊藤一成さん（教育2年）は授業でT―ACTの存在を知り、T―ACTの開始に合わせて活動を始めた。主な活動内容は、「つくば市にワンセグの電波が入りにくい原因や現状の調査」などだ。

調査は午前中、夕方の時間帯に1人のメンバーが2度行う。ドコモ、au、ソフトバンク、大手キャリアの3社の携帯電話を用い、大学構内でワンセグの入り具合を見る。30秒の調査を行い、10秒以上チューニングまたは電波を受信中となる場合は、受信出来ないと判断する。調査結果は年内に「ワンセグマップ」としてまとめる予定だ。

メンバーらは更に、ワンセグが受信出来ない原因を専門家にも話を聞きたいと考えた。T―ACTでの活動の趣旨を説明し、本学出身の市議会議員や教授に相談したという。すると、人から人へと話が伝わり、ついにNHKの技術者に話が聞けることになった。

NHKの技術者によると、やはりつくば市の位置に原因があるという。つくば市の放送局は東京局（東京タワー）と筑波局（筑波山のふもと）の2局。つくば市は東京タワーのカバーエリアの端に位置しているため、ワンセグ受信機の性能や受信環境によって、ワンセグ放送が十分に受信出来ないケースがあるそうだ。ただNHKの総合テレビだけは、筑波局から電波を出しているため、49チャンネルにチューニングすれば見ることが出来る。

ワンセグ電波調査の様子

T―ACTがなければ、一学生の思い付きからNHK技術者に話を聞く機会はきっと生まれなかったはずだ。伊藤さんは「ちょっとした不満をチャンスと思って、生かしてほしい。せっかくT―ACTがあるのだから行動を起こすべき」と語った。

筑波学生文芸賞

T―ACTは本来、個人の短期間の企画に力を貸す取り組みだが、一般学生団体が申請を行ったケースもある。筑波学生文芸賞運営委員会という、筑波学生文芸賞を開催しているサークルだ。通年で1つの企画を扱う団体が承認されることは珍しい。

同会では、市内に住む学生などから小説作品を募集し、冊子を作成して無料配布するという活動を行っている。「あなたの小説が読みたい！―第二回筑波学生文芸賞の作品および一般選考委員の募集―」という企画名で、今年3月から6月までの4カ月間、T―ACTから援助を受けた。

会長の柏零さん（社工3年）は「申請までの道のりは容易ではなかった」と苦労を口にした。一般学生団体の活動を援助した前例がなかったため、T―ACT側も困惑していた模様だ。

承認まで何度もパートナー教員と相談を重ねた。最終的には、企画の一部、今回は募集のみを抜き出して申請するなどの工夫をすることで、承認にこぎつけた。

主な援助内容は作品と一般選考委員の募集広報の協力だ。また、周辺高校の3年生にビラ配布も行った。「これはパートナー教員の勧めで、当時このような発想はまったくなく、目から鱗だった」という。このように、告知などに関するアドバイスももらえるのである。結果、昨年度よりも多くの作品と一般選考委員を集められた。

一方、T―ACTに「直接的な部員勧誘活動は禁止」という制約があり、これがメンバーを悩ませた。「この点に細心の注意を払った。小規模な一般学生団体としては厳しい制約だ」と柏さん。しかし、それでもT―ACTを通じて入会した会員もおり、「募集しなくても、活動を多くの人に知ってもらうことで、新会員獲得のチャンスが生まれた」と語った。

運営委員に聞く T―ACT

学生支援GPに採択されるなど、学内外から高く評価されているT―ACTの活動。4人の運営委員に話を聞いた。【取材協力＝杉江征准教授（ケア）三輪佳宏講師（シス医）樫村美助教（入間学）大手昇一主任（学生生活課）】

気軽にT―ACTへ

「これまでの本学の学生支援の充実と、T―ACT準備委員会の入念な準備が、GP採択につながった」。そう語るのは、杉江准教授。クラス担任制度や学生支援室、保健管理センターなどで学生支援の実績のある本学だからこそ、T―ACTのようなプロジェクトを作れたという。

「学生の顔が変わった」「人間関係の広がるいいチャンネルになった」樫村助教と三輪講師は声をそろえる。T―ACTで活動する学生は、表情が良くなり、自分からアイデアを出すようになったという。

「教職員の参加を増やしたい」「T―ACTの人材バンクへの登録数を増やしたい」と、杉江准教授と大手主任。今、T―ACTで活動をしている教職員には、以前から学生の課外活動に理解のある人が多いという。「もっと多くの教職員に来てほしい」と運営委員は声をそろえた。

最後は「学生への願いとして、「やりたいことを思い付いてすぐに来ました。そのくらい気軽にT―ACTに来てほしい」と運営委員は声をそろえた。

視点

新たな参加と体験を

「参加力」と「体験力」。耳慣れないが、T―ACTのキーとなる言葉だ。

本学は国内でも有数の規模を誇る総合大学だ。さまざまな分野の学問、そのエキスパートや学生が、このつくばには集まっている。

だが、これまではそのさまざまな学問、エキスパート達が交わり、一つのことに向けて共同して活動するということは、少なかったのではないだろうか。T―ACTの登場によって、そのねらいはどうだろう。思いがけない毎日が待っているかもしれない。

屈や不満を感じているなら、一度T―ACTを訪ねてはどうだろう。思い切って参加することで出会い、新しい体験が生まれている。

「これまで出会うことのなかった人との出会いがある」T―ACTで活動をした複数の学生が、そうT―ACTの魅力を語った点は、印象的だ。

今の学生生活に退屈感が漂っている状況が変わりつつあるように感じる。

これまでお互いに交わることの少なかった、異分野に属する学生や教職員同士が、新たに生まれたT―ACTという場に参加することで出会った人との出会いがある。

T―ACTの登場によって、そのような状況が変わりつつあるように感じる。

これまでお互いに交わることの少なかった、異分野に属する学生や教職員同士が、新たに生まれたT―ACTという場に参加することで出会った人との出会いがある。

HELLO! 先端科学

円周率計算新記録達成

性能チェックで世界記録 多分野で研究を支える

先日、本学の高橋大介准教授（CS）らのグループが本学の誇るスーパーコンピュータ「T2K筑波システム」を使って、2兆5769億8037万桁という円周率計算の世界新記録を樹立した。ギネスブックに申請し、3受理された記録は、今までの記録1兆2411億桁の2倍を超す大記録である。

円周率計算はT2K筑波システムの性能をチェックする目的で行われた。円周率の計算を行う「プロセッサ」、それらを繋いでデータのやり取りをする「ネットワーク」、計算結果を記録する「メモリ」とスーパーコンピュータのすべての性能がチェック出来る。

T2K筑波システムは現在世界第47位の性能を持つ。これは連立方程式を解くプログラムで行われる性能チェック法に基づいたものだ。しかし、この方法は主に「プロセッサ」の性能を計るもので、コンピュータ全体としての性能は「プロセッサ」、「ネットワーク」、「メモリ」のすべての性能を計らなければ分からない。

そこで高橋准教授は、円周率の計算で性能のチェックをすることを提案した。その結果、円周率計算の世界記録が樹立され、T2K筑波システムの性能、信頼性、耐久性の高さが実証されたのである。

スーパーコンピュータは大学や企業などの研究機関、とりわけ物理学、工学、気象学などの分野でなくてはならない存在である。

例えば、私達が普段何気なく見ている天気予報は、スーパーコンピュータを用いて行ったシミュレーションをもとに出されている。風向きや気圧など、膨大なデータを数十から数十万個のプロセッサで計算。変動を予測する。1つ1つのプロセッサは市販のパソコンと同じ能力だが、それらを同時に使うことでスーパーコンピュータの高い計算能力は生まれるのだ。

また、スーパーコンピュータは計算をするだけでなく計算過程で有益な副産物を生むこともある。高橋准教授によると、今回の円周率計算の中心となったプログラムは、すでに物理学や化学の分野での計算に使われているそうだ。

T2K筑波システムは大学内外からの使用申請があるためほとんど休むことなく稼働しているが、安定して高い能力を発揮している。本学における世界最先端の研究は、世界有数の性能を持ったスーパーコンピュータによって支えられているのである。（本紙・西川大照＝社会学類）

T2K筑波システム

卒業生からの手紙

茨城新聞 北別府由美さん

茨城新聞社（本社＝水戸市）に入社してもうすぐ5年。4月の異動で念願だったつくば支社に赴任し、現在はつくば市内の研究機関や行政などの取材を担当している。

実は異動後の初仕事は筑波大の入学式の取材だった。しかも私事で恐縮だが、その日はちょうど私の30歳の誕生日。不思議な縁を感じ、当時私もこの入学式で期待に胸を膨らませていたのだろう、と思いを馳せた。

取材先は母校入学式

私が大学院に在籍していたのは平成15―16年度の2年間。遺伝子工学分野の研究室に所属し、乾燥に強い作物を作るために研究していた。

私は学部では他大学の文学部で心理学を専攻していたので、傍から見ると一貫性がないと思われるかもしれない。よく、「なぜ」と聞かれる。心理学を学ぶうちに脳や遺伝子の働きに興味を持ち、遺伝子工学を学びたくなった――と説明することもある。しかし、こだけの話、学部の頃からマスコミへの就職を希望していたが、就職活動がうまくいかなかったのだ。心理学にも若干飽きてしまったので、面白そうな他分野の大学院に進学した――という方が正確である。

何とか大学院に入学は出来たが、入ってからが大変だった。文学部出身の私には、入学時点で身に付けておくべき技術や知識が身に付いていなかった。研究室には厳しく指導してくれる怖い先輩がたくさんいて、入学早々、エル計算も出来ないのこうちの研究室に入ったの？とあきれられ、悔しいやら恥ずかしいやらで赤面したのを覚えている。研究を始めてからも実験は失敗の連続だった。実験室と圃場を行き来する生活にうんざりし、逃げ出したくなったこともあった。

そんな時、私は友人と実験室を抜け出し、気分転換をした。研究室にはエチオピア、タイ、中国、チュニジア、ボリビア、ミャンマーなど出身地も宗教もさまざまな留学生がいて、彼女たちと一緒に鍋パーティをしたり、夜中にラーメンを食べに行ったり、筑波山登山をした。2年生の夏には、タイの留学生の実家に2週間遊びに行った。怖い先輩に「2週間も休むとは研究をなめているのか」と怒鳴られたのも、今では良い思い出だ。

つくば支社へ異動後は、月に数回は取材で筑波大に来ている。思い出の詰まったキャンパスは、私にとって初心を取り戻せる大切な場所。在学生の元気な姿に刺激を受けることもある。これからも弊紙でたくさん筑波大を紹介出来るよう、筑波大関係者がご活躍されることを心から祈っている。（平成16年度バイオシステム研究科修了）

スポーツの舞台裏

第10回　セルフモニタリングとセルフコントロール

心理状態を包括的に測定
分析を基にトレーニングを

スポーツは「心・技・体」から成ると言うが、「心」のトレーニングはあまり実践されていないのが現状だ。それは緊張などの心理状態を分析しようにも、簡単な方法がなかったことに要因がある。

本学の坂入洋右准教授（体育）は、征矢英昭教授（同）と共に、心理状態を簡単に見ることの出来るテストを作成した。「TDMS（三次元気分尺度）」というもので、8つの質問に答えるだけで、包括的に心理状態を測れ、グラフに現せる。

これまでの心理状態の度合いを測るテストは質問項目数が20－50と多く、不安や緊張などの限られた心理状態しか測ることが出来なかった。また緊張の度合いを示すグラフは、「沈静」と「興奮」を極に、「覚醒度」だけを測る直線だった。今回作成したグラフには、快適度、安定度、活性度が加えられ、より細かく心理状態を分析出来るものになった（下図）。

「一口に緊張といってもアスリート選手の試合中の緊張と、弓道選手の矢を射る時の緊張では、性質が違う」と坂入准教授は話す。アメフト選手は試合中に興奮と活性度が高い方が良い動きが出来る（グラフ上のAのエリア）が、弓道選手はある程度興奮しつつも、安定度が高い方が良いそうだ（グラフ上のBのエリア）。

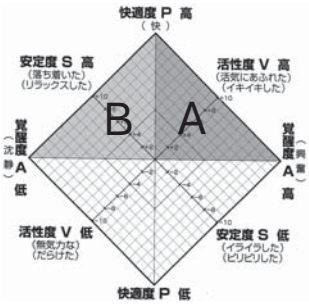
心理状態は課題差と個人差に影響され、同じ競技をしている人であっても一概に言うことは難しい。課題差とは、バスケットボールで言う、リバウンドかフリースローかといった動作や目的の差。またフリースローの時に、冷静な方が入る人と興奮している方が入る人がいるというのが個人差だ。

坂入准教授は「大切なのは、グラフ上で自分が今どの辺にいるのかを知ること」と言う。このテストとグラフを用いて、調子が良い時と悪い時の心理状態をつかむことで、コントロールが可能になる。ただし心理状態は試合結果に影響されるため、テストは試合前に行う。毎回の試合や練習前にテストをし、データを蓄積することで、結果の信頼度は上がる。

更に踏み込んで、自分の心理状態を制御（セルフコントロール）するにはどうすれば良いのだろうか。緊張している時に落ち着こうと頑張ると、交感神経が刺激され、更に体が興奮・緊張してしまう。沈静と興奮を司る自律神経系は、私たちの意志では制御不可能なのだ。

緊張をほぐす際の鉄則は「体から心へ」である。息を吸いながら肩を上げ、息を吐きながらストンと落とす。これだけでも十分リラックス効果はある。また深呼吸をする際、吐くのを長めにすると安静が得られ、吐くのを短く、強めに複数回に分けると活力が得られる（これについては本紙2・7号でも特集した。「メンタルが弱い」と言って、むやみやたらに練習や試合数をこなすだけでは、選手の伸びしろにも限界がある。これからは選手自身の心理状態がどのように身体に響くのかを把握し、コントロールするトレーニングが必要なのだ。

（本紙・雪丸千彩子＝人文学類）



TDMSの二次元グラフ

秋季関東大学バレーボールリーグ戦

バレー
女子　2年ぶりリーグ優勝
男子　入れ替え戦で2部降格

秋の関東大学王者を決める秋季関東大学バレーボール1部リーグ戦が、9月12日－10月20日に、男子は日本体育大学健志台キャンパス米本記念体育館（横浜・青葉区）、女子は早稲田大学記念会堂（東京・新宿区）などで行われた。今回のリーグ戦は新型インフルエンザの影響で2次リーグが中止となり、順位は1次リーグ7試合の結果で決定した。

本学は男子と女子とで明暗が分かれた。春季2位だった女子は、7戦全勝で2年ぶりのリーグ優勝を果たした。一方、春季8位の男子は2勝5敗の7位。入れ替え戦で慶應義塾大に敗れ、28年ぶりに2部降格となった。

■女子

女子は慶応大戦で2セットを落とした以外は全てストレート勝ち。春に最終戦で敗れ、優勝を奪われた東海大も危なげなく退け、全勝で1次リーグを終えた。

その後は2次リーグが中止になったため、そのままキャプテンの皆本明日香（体専4年）が最優秀選手賞に、中村早紀子（同）がスパイク賞とレシーブ賞に選ばれるなど、4人が5つの賞を獲得し、実力を大いに見せつけた。

中西康己監督（体育・准教授）は「夏の練習を通じて力が付いており、特に守備が非常に安定していた。今後は攻撃力も高めて、全日本インカレ優勝を目指したい」と話した。

■男子

男子は開幕から5連敗を喫したものの、その後は3連勝し、8試合終了時点で3勝5敗の6位だった。しかし2次リーグが中止になったため、2勝5敗の7位で順位が確定。春に続いて入れ替え戦に回ることになった。

迎えた11月1日の入れ替え戦では、秋季リーグ男子2部2位の慶應義塾大と対戦した。「絶対に負けられない」という気持ちが空回りし、セットを奪った第3セット以外は実力を発揮できなかった。結局セットカウント1－3で敗北。1981年の秋季リーグ以来の2部降格となった。

都澤凡夫監督（体育・教授）は「結果は非常に残念。ただ、夏の合宿からメンバーが入れ替わるなど、試行錯誤の末にレシーブが安定するようになった。成果が出ていたのは収穫だと思っている」と話した。

個人賞は以下の通り。【女子】最優秀選手賞＝皆本明日香▽スパイク賞＝村早紀子▽セッター賞＝渡邊美穂（体専3年）▽レシーブ賞＝中村早紀子▽リベロ賞＝岩永麻里江（同）【男子】サーブ賞＝椿山竜介（同）

関東大学バスケットボールリーグ戦

バスケ
女子　惜しくも準優勝
男子　7位に終わる

■女子

第59回関東女子バスケットボールリーグ戦が、9月5日－10月25日にかけて国立代々木競技場第2体育館（東京・渋谷区）などで開催された。6連覇を狙う本学だったが、13勝の拓殖大に追いつくことが出来ず11勝3敗で準優勝に終わった。

リーグ前半で8勝し、ている本学は、先月17、18日に10連勝中の拓殖大と対戦した。1戦目は両チームとも一進一退の攻防が続き、延長戦。開始早々大鷹さおり（体専4年）がジャンプシュートを決め好調かと思われたが、拓殖大の厳しいプレッシャーを受け攻撃のチャンスをつかめないまま延長戦終了、72－81で敗れた。続く2戦目はリバウンドを調整し82－71と勝利した。

大高敏弘監督（体育・教授）は「ミスが多く、相手側の得点源を多く与えてしまった」と話した。

■男子

第85回関東大学バスケットボールリーグ戦が、9月5日－11月1日にかけて本学体育館などで開かれた。今季から1部に昇格した本学だったが序盤での敗戦が響き7位に終わった。

リーグ中盤の先月3、4日には専修大戦が本学体育館で行われた。連敗が続く本学は、地元での応援を受け序盤からエース鹿野洵生（同）を中心に着実に点を重ね、戦目を82－57と快勝、続く2戦目も攻守共に圧倒し、95－48と連勝を挙げた。

吉田健司監督（体育・講師）は「5年ぶりの1部で、経験の浅さが出てしまった」と話した。

ゴール下で競る水谷佳代（体専2年）（日大女子戦）

個人賞は以下の通り。【女子】敢闘賞＝大鷹さおり▽優秀選手賞＝服部亨子（体専3年）

東日本新人競漕大会

漕艇
ダブルスカル　男女ともに優勝

第32回東日本新人選手権競漕大会が先月3、4日に戸田オリンピックボートコース（埼玉県戸田市）で開催された。本学は男子ダブルスカルの部で越智元太（体専2年）、中村賢介（入文2年）組が、女子ダブルスカルの部で江藤麻子（国総2年）、阪本悠香（障害2年）組がそれぞれ優勝した。

ダブルスカルはオールを1人2本ずつ持って漕ぐスカル種目の一種で、2人乗りボートで競技する。東日本新人選手権は1000㍍のタイムを競う。

■男子ダブルスカル

越智、中村組は予選から後続を5秒引き離し、3分25秒42と全体でタイム1位になるなど好調に滑り出した。続く準決勝はスタートでつまずき千葉大にやや出遅れたものの、2位で決勝に進出を決めた。決勝ではスタートを修正してそのまま逃げ切り、3分37秒00で千葉大とコンマ57差で辛くも優勝した。

■女子ダブルスカル

江藤、阪本組は、予選を1位で通過。勢いに乗ったまま決勝に臨んだ。決勝でも後続を3秒離し、4分16秒11でゴールするなど強さをみせた。

キャプテンの江嶋剛さん（応理3年）は「来シーズンにつながる良い経験が出来たと思う」と語った。

全日本学生バドミントン選手権大会

バドミントン
女子　ダブルスで準優勝

第60回全日本学生バドミントン選手権大会が、10月16日から22日にかけ、滋賀県立体育館（滋賀県大津市）などで行われた。本学からは女子団体、男子ダブルスなどが出場した。女子ダブルスでは、佐々木理恵（体専3年）、田崎亜由美（同）組が準優勝を果たし、2010年9月に台湾で行われる世界学生バドミントン選手権大会への出場が内定した。

本学は女子団体でベスト8入りを果たし、女子シングルスでも武田陽子（同4年）、土江奈津子（同1年）がベスト16に入った。女子ダブルスでは、奥井智菜美（同2年）、住田有希恵（同）組は準々決勝まで全試合をストレートで勝ち進むが、東海大に0－2で敗れベスト8。佐々木、田崎組は危なげなく勝利を重ね、準決勝まで進出。法政大を2－1で破り、早稲田大との決勝に臨んだが、0－2で敗れた。

この結果、両ペアは12月に行われる全日本総合バドミントン選手権大会への出場権を獲得した。

吹田真士監督（体育・助教）は「チームとしての成長が必要。個々が実力を伸ばしてくれればと語った。

日本ジュニア大会

陸上
11人が入賞　やり投で新

第25回日本ジュニア陸上競技選手権大会が10月16－18日にかけ山梨県小瀬スポーツ公園陸上競技場（山梨県甲府市）で開催された。

今年も本学陸上競技部から多数の優勝者・入賞者が出た。

中でも、やり投の槍奏子（本専1年）は55㍍76でジュニア日本新記録・大会新記録を樹立し、女子優秀選手に選出された。その他の種目では、男子110㍍ハードルで大会秀樹（同）が14秒18、女子走幅跳びでは中野瞳（同）が5㍍97で、女子三段跳では前田和香（同）が12㍍61でそれぞれ優勝。また、三段跳びで大坂阿玖里（同）が12㍍29で2位に、円盤投げで目下望美（同）が45㍍38で3位に入るなど、合わせて11人が入賞を果たした。

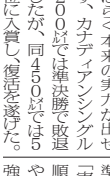
坂元は大学卒業後もカヌーを続ける意向だ。

小野はカヤックシングル450㍍で決勝進出。その決勝では、スタートでは上位と並んでいたものの、後半に思ったほど伸びず6位となった。同200㍍でも決勝に進出し、5位に入賞した。

栗本宣和コーチ（体育・準研究員）は結果について「実力は出せている。更に順位を上げるために、筋力や技術など伸ばせる部分の強化が必要」と話した。

トキめき新潟国体

カヌー
2人が入賞　向上目指す


小野祐佳

トキめき新潟国体（第64回国民体育大会）のカヌー競技が先月21－25日に寺泊港湾内特設カヌー競技場（新潟県長岡市）で開催された。本学からはスプリント部門に坂元暢泰（体専4年）と小野祐佳（同1年）が出場し、坂元が成年男子のカナディアンシングル450㍍で5位、小野が成年女子のカヤックシングル450㍍で6位、同200㍍で5位に入賞した。

坂元は故障の影響でしばらく本来の実力が出せず、カナディアンシングル200㍍では準決勝で敗退したが、同450㍍では5位に入賞し、復活を遂げた。

全日本学生柔道体重別選手権大会

小倉・牧・田中康介が優勝

他5人が上位に入賞する 本学から19人が出場

柔道

学生柔道の体重別日本一を決める全日本学生柔道体重別選手権大会が、10月11、12日、日本武道館（東京・千代田区）で開催された。本学からは19人が出場し、66㌔級で小倉武蔵（体専2年）が昨年に引き続き優勝、81㌔級で田中康介（同3年）、57㌔級で牧志津香（同2年）がそれぞれ初優勝を果たした。また、66㌔級の田中浩平（同）が準優勝、81㌔級の川瀬孝司（同3年）、48㌔級で伊部尚子（同4年）、100㌔級の新井優来（同3年）100㌔超級の白本周太郎（同4年）が第3位の成績を収めた。

初戦から小倉は順調に勝ち上がった。決勝戦の相手は本学の田中浩平。高校時代からのライバルでもあり、現在は毎日共に練習に励んでいる2人は互いを知り尽くしていた。決め手を欠き、勝負は延長戦に持ち越されたが、互いに決め切れず、3−0の判定で小倉が勝利し、2連覇を決めた。

小倉は「自分自身成長したなと思った。次の講道館では優勝して結果を残したい」と述べた。

小倉武蔵

牧志津香

その日の田中康介は絶好調で、決勝まですべて一本勝ちで駒を進めた。決勝の相手は平尾謙二（中央大）。開始32秒、組み合った瞬間に内股から小内刈りを掛けて技あり。そのまま相手の上体が返る前に腕ひしぎ十字固めを決め、一本。高校から数えても自身初のタイトルを獲得した。

田中康介は「優勝はひそかに狙っていた。実現出来て良かった。講道館杯には初めて出場するので、チャレンジャーとして臨んで行きたい」と語った。

牧は、初戦から順当に勝ち上がって行った。迎えた決勝戦の相手は大友真貴子（東海大）だった。開始31秒、組み際に大友が前に出た所で、牧は横にいなしながらの大外刈りを掛け、一本。この日会心の試合を見せて、優勝を手にした。

牧は「去年はけがなどで欠場だったので、絶対優勝するという気持ちで臨んだ。目標はオリンピックや世界。次の講道館杯は優勝を目指したい」と話した。

今回の結果を、岡田弘隆総監督（体育・准教授）は、小倉は良い動きをしていた。田中浩平とは実力で拮抗していたが、今回は気持ちで小倉が勝っていたようだ。田中康介はダークホース的存在だった。この日はノッていたと思う。牧は出場選手の中では抜群。圧倒的な強さだった。大学全体としては良くやったと思う」と評価した。

世界ジュニア選手権大会

森下・山本・緒方がV 西山が3位入賞果たす

柔道

20歳以下の柔道ジュニア選手が体重別世界一を競う世界ジュニア選手権大会が10月22−25日、フランス（パリ）で開催された。本大会は本学からは4人が出場し、66㌔級で森下純平（体専1年）、63㌔級で山本小百合（同）、78㌔級で緒方亜香里（同）がそれぞれ優勝を果たした。また、90㌔級で西山大希（同）が3位入賞の成績を収めた。本大会は手選手の登竜門となっており、メダルを取れば今後飛躍し、取れなければ消えてしまうというジンクスがある。若手選手に取って非常に重要な大会であった。

森下純平

山本小百合

緒方亜香里

森下は2回戦でアレス（スペイン）と対戦。試合前半で、有効、技ありを続けて先取され、窮地に立たされる。だが残り1分弱、相手がばてた所を、得意の大内刈りを仕掛け、一本。その後も準決勝以外をすべて一本で制し、優勝した。

森下は「選手に選ばれるとは思っていなかったが、出るからには絶対勝つつもりだった。講道館杯は一戦一戦本気に行きたい。まずは一勝を」と述べた。

山本は辛勝もありつつ、決勝まで勝ち進んだ。決勝の相手はソン・セロン（韓国）。序盤、互いに指導をもらう。試合が大きく動いたのは中盤、大外刈りからの体落としを浴びせ、技あり。そのポイントを守り通し、優勝を決めた。

山本は「自分が自指すのはシニアなので、通過点だったが優勝出来て安心した。講道館杯は目指すは優勝。1回戦から選手は強いので、頑張る」と語った。

緒方はオール一本勝ちで決勝にコマを進めた。決勝の相手は昨年度優勝者のハリソン（アメリカ）だった。「やってみたくてわくわくしていた」と話す緒方だったが、得意の内股で2回の技有りを取り、合わせ技一本で優勝した。

緒方は「優勝は嬉しかったけど、まだまだ。講道館杯は去年準優勝したので、優勝狙って行ける所まで行きたい」と話した。

今回の結果を岡田弘隆監督（体育・准教授）は「森下は日本の目指すべき掴んで一本を取る柔道をする。課題もあるがいずれ代表を狙えるようになるだろう。山本も同じく正攻法の柔道をする。体力不足はぬぐいが、将来が楽しみだ。緒方は圧勝だった。力強い柔道をするので、相手はやりづらいだろう」と評価した。

首都大学野球秋季リーグ

延長戦で東海大に惜敗 投手中心のチーム作りを

野球

平塚球場（神奈川県平塚市）などで9月5日から行われていた首都大学野球秋季リーグ戦が、10月25日に終了した。本学は5勝6敗で、3位に終わった。

9月26日、それまでの4戦を全勝して迎えた東海大学との1回戦。激しい投手戦となり、今季初の延長戦となった。先発の野田祐（体専2年）は走者を背負うものの、後続をきっちりと打ち取る安定したピッチングで、9回まで相手の得点を許さなかった。試合が動いたのは延長10回。1点先制されると、その裏、本学も1点を返し、試合を振り出しに戻した。しかし11回に勝ち越され、反撃出来ず1−2と惜敗した。2回戦も投手戦となったが、相手が着実に点数を重ね、0−5と完封負けを喫した。

相手の先勝で迎えた帝京大との2回戦が10月4日に行われた。本学は3回裏、2つの四球などで1死1、2塁とすると、山本洋平（体専4年）の適時打で1点先制。5回裏にも、中島圭太（同4年）の単打を皮切りにこの回4本の長単打などで3点を追加し、5−0とした。7回裏、8回裏にもそれぞれ1点を追加し、7−0と勝した。

次回の公式試合は、新チームになった後の春季リーグである。来春に向けて、川村卓監督（体育・準教授）は「投手中心の守り抜く野球をしたい。チーム全体が謙虚になり、プレー1つ1つが正確になることが大事。冬にしっかりチームを作りたい」と語った。

全日本学生優勝大会

雪辱果たせず 2回戦敗退

剣道

大学剣道の団体日本一を決める第57回全日本学生剣道優勝大会が10月25日、日本武道館（東京・千代田区）で開催された。同大会には64校が出場し、本学は2回戦で敗退した。

本学は1回戦で九州大を6−0で下し、好調な滑り出しを見せた。だが、2回戦では本大会2連覇中で、昨年度の決勝でも対戦した國士舘大と対戦し、1−2で惜しくも敗れた。

男子監督の鍋山隆弘監督（体育・講師）は「2回戦が山だとは思っていた。残念な結果。次から代は替わるが、新チームで頑張ってほしい」と語った。

記録ファイル

◆サッカー

第12節（後期開始）からの結果は以下の通り

▽筑大3−1慶大▽筑大3−3中大▽筑大0−1明大▽筑大4−3早大▽筑大1−2国士舘大▽筑大1−1専修大▽筑大0−1流経大

斬桐舞フランス公演

パリでソーラン節踊る 東京で凱旋公演も

本学学生団体でYOSAKOIソーランなどを踊る「斬桐舞」が、11月7、8日にフランスのパリで開かれる日仏の文化交流イベント「SAMURAI JAPON2009」に参加する。本学生7人を含む9人のメンバーが渡仏し、日本の伝統文化を発信、現地の人々と異文化交流を図る。

SAMURAI JAPONが開催されるのは今年で6回目。今回のテーマは「心響日本伝統美の世界」で、斬桐舞のソーラン節演舞の他、和太鼓と津軽三味線の演奏や、日本酒やお好み焼きなどの食べ物も振る舞われる予定だ。

斬桐舞は、「障がいの有無や国籍、老若男女関わらずみんなで楽しく踊ろう」という「ユニバーサルソーラン」の理念を掲げての活動が注目されていた。最近では、7月の国際生物学五輪や雙峰祭などで演舞を披露。団体には、学生を始め社会人や主婦、全盲者を含む視覚障害者やダウン症の青年などが所属している。

パリ公演を前に代表の守屋俊甫さん（体育1年）は「普段演舞で伝えているメッセージをフランスでも発信したい」と抱負を語った。斬桐舞は2日間で25分ずつの2公演を行い、新しい振り付けもお披露目する。帰仏後の12月13日には東京ヤクルトホール（東京・港区）凱旋公演も行われる予定だ。

問い合わせ＝kirikirimai.of.t.sukuba@gmail.com（守屋）

激しい演技に雙峰祭会場が沸いた

顔

風を感じ、より遠くまで

13メートル。バスの車体よりも長い距離を前田和香（体専1年）は軽々と跳ぶ。ホップ、ステップ、ジャンプ。「助走に入る一歩目から流れをつくる。風を感じながら、より遠くに」。今年、インカレの三段跳びの部門で、見事優勝を果たした期待の新入生。

日本選手権でも3位と、実力のある彼女だが、本格的に三段跳びを始めたのは本学入学後だ。もともと走り幅跳びを専門としていたが、転機は高校2年の時に来た。記録が伸び悩み、どんなに練習をしても思うような結果が出ない。「何で頑張っているのに、伸びないのだろう」。

そんな中迎えた秋田国体。幅跳びの種目がなく、顧問の先生に三段跳びに出てみないかと勧められた。それまでほとんど練習をしていなかった種目だが、出てみてびっくり、優勝してしまった。初めて挑戦した三段跳びは、新鮮であった。

「何でも楽しくやろう」

インカレ三段跳びで優勝

前田和香（体専1年）

前向きで、ひたむきな性格から、どんどん記録を伸ばしていった。

普段は、おっとりとした雰囲気の普通の女の子。どこに強さの秘訣があるのだろうか。「彼女の素晴らしさは、意志の強さと探求心」と先輩の翁晋平（同3年）は言う。

練習メニューはコーチと相談しつつ自分で決める。朝練も自主的に取り組んでいる。「他の種目も三段に生かせればいいという感じでバランスよく練習を行っている」という通り、三段跳びだけでなく、幅跳びや短距離の練習にも励む。

コーチの小山宏之（準研究員）は「助走に安定感があっていいが、まだまだこれから伸びる選手」と期待に胸を膨らませる。日本の女子三段跳びのレベルは高くない。世界に挑戦するためにはあと1㍍は記録を伸ばす必要がある。

「目標は日本記録14㍍04を更新すること。そして、4年後のロンドン五輪に出場したい」と世界を視野に入れている。

三段跳びで決してやってはいけないことは、一つ。跳び急いで、流れを崩すこと。ただ自分の中のリズムを感じて、彼女は今日も練習に励む。

（本紙・扇本剛司＝社会工学類）

世界の教室から

ほんの少しの「勇気」で変化

カリフォルニア大学（アメリカ）
堀江　香世

私は今年の9月から10カ月の予定で、アメリカのカリフォルニア大学デイビス校（UCD）で国際関係学部に在籍し、文化人類学を中心に勉強している。UCDはカリフォルニア州の首都サクラメントの近郊にある。大学は演習農場を併設しており、広大な敷地面積を有している。構内には校舎の他に麦畑やブドウ畑もある。カリフォルニアの真っ青な空と澄んだ空気、快適な気温と湿度。日本とは違う環境での生活は心も体も刺激される。

アメリカの大学での生活は、高い英語能力だけでなく積極性が必要とされ、毎日が戸惑いと挑戦の繰り返しである。ここでの生活を通じて私は、目の前の壁に立ち向かう「勇気」が成長し続ける原動力だと学んだ。

アメリカの大学では、学生は熱心に勉学に励む。図書館は夜の12時まで開いており、放課後には勉強する学生で一杯になる。授業中、生徒は積極的に手を挙げ発言をする。学生の国籍も年齢も多様で、授業内のディスカッションでは、個性が光る。

留学当初は、彼らの積極性に圧倒され自ら発言をすることはなかった。心の中では「いつか自分もみんなの前で発言できるようになりたい」と思っていた。

ある日、突然転機が訪れた。大学でクラブ活動に参加しようと、思い切って学内のアカペラサークルのオーディションを受けることにした。オーディション会場は百人近くの学生でほぼ満員で、彼らの前で一人ひとり歌わなければいけなかったのだ。

プロ歌手並みに上手い学生を目の前にし、歌う前に続々と帰っていく学生を見て、私の緊張はピークに達した。しかし、今ここで逃げたらこれから先ずっと後悔すると思い、勇気を出して歌うことを決意した。緊張で声が震えながらも笑顔で一生懸命歌った。結果は駄目でショックだった。しかし、勇気を出してオーディションを受けたという達成感の方がもっと大きかった。

それ以来、人前に立つことの恐怖を克服し、授業でも積極的に発言出来るようになったと思う。ほんの少しの「勇気」だけで、日常に大きな変化をもたらすことが出来る。自分を信じて恥ずかしがらない「勇気」こそが、目の前の壁を打破する第一歩なのだと確信した。（国総2年）

市内のお祭りで、農家のマスコットと

秋季スポーツ・デー
今年は4492人が汗流す
「密告中」ではチーム戦も

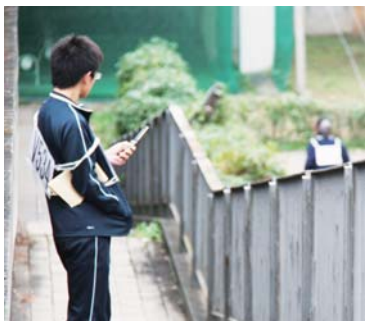
第33回秋季スポーツ・デーが、先月24、25日に行われた。今回は本学筑波キャンパス内の15カ所が会場となり、本学の学生や教職員などを合わせて4492人が参加した。各会場では、バレーや駅伝などの正式種目やサークル企画の他、事前の申し込みが不要な「Sports Field」、学生委員会企画である「スポデー選手権」が開催された。

「Sports Field」では、ストラックアウトや体力年齢測定など8種目が行われた。今年から新たに開催されたフットサル大会は人気が高く、競技中のコートからは盛んに歓声が上がっていた。

「スポデー選手権」は陸上競技場が会場となり、1日目に「筑波大学大運動会」が行われた。参加したチームは赤組・青組・白組に分かれ、綱引きやリレーなど6種目でのポイントを競い合った。

優勝したのは876点を獲得した赤組。また、最もポイントを獲得したチームには最優秀チーム賞が贈られた。最優秀チームとして表彰された「チャージ（白）」の梅木太郎さん（知機2年）は、「綱引きでは皆で一致団結して競技に臨んだ。苦労もあったけど、その分優勝出来てうれしかった」と話した。

「スポデー選手権」2日目は「密告中」が行われた。この企画は、参加者全員がゼッケンを身に付け、体芸エリア内で与えられたミッションをこなしながら、他の参加者の背番号を携帯電話のメールで企画本部に「密告」するものだ。今年からは新たにポイント制が導入された他、個人戦に加えてチーム戦が追加された。競技が始まると、参加者たちが自分の背番号を見られないよう壁を背にして歩いたり、建物の陰に隠れて様子をうかがう姿が見られた。スポデー学生委員会委員長の古谷貴章さん（数学3年）は「春季は雨で出来ない種目があったが、秋季は2日間とも開催出来て良かった。スポデーは始まるとあっという間だ。皆さんが身体を動かす良い機会になってくれれば」と話した。


高台から下の参加者を「密告中」

新クラッチバック発売
1カ月で128個販売
学生の意見から商品化

本学オリジナルグッズを扱うUTショップに、先月1日から新色のクラッチバッグが発売されている。限定150枚生産の「LimitedGold」（以下LG）、「Limited Gold(Matte)」（以下LM）と従来の6色に加わる「UniversityPurple」（以下UP）が登場。同月31日現在、LGが36枚、LMが53枚、UPが39枚の計128枚が売れた。

新色のクラッチバッグ発売を企画したのは伊藤一成さん（教育2年）。「黒と金の配色のクラッチバッグが欲しい」と今年7月に直接紫峰会に赴き、制作の提案をした。同会グッズを担当している長川英祐さんは、「今までのラインナップにない大胆な配色で、伊藤君の提案に驚くと共に、彼の熱意に動かされた」と話す。

紫峰会スタッフと検討を重ねた結果、光沢のある黒とツヤなし渋い黒、それぞれの生地に特注の金の箔押しをした高級感のあふれる2種類のバッグと、パールホワイトの生地にスクールカラーである紫でプリントした本学らしいバッグの計3種類が完成した。

新色クラッチバッグは学園祭でも好評で、本学生だけでなく、本学の卒業生や他大の学生らもが購入していった。LGの購入を決めた社会工学類1年生の男子学生は「ゴールドの文字と150枚限定というところに魅力を感じた」と話した。

伊藤さんは、「たくさんの人に使ってもらえて本当に嬉しい。新しい商品も考えているのでUTショップに注目してほしい」と話した。また、長谷川さんは「学生からの自由なアイデアは歓迎している。こちらも出来る限りの対応したい」と述べた。

新クラッチバッグを持つ伊藤さん

宿舎コインランドリー導入
学生の声収集
賛否分かれる

来年度から宿舎にコインランドリーを導入することが検討されている。

コインランドリー導入は学生生活課が進めており、全代会は学生の意見を集め先月23日に、西川潔副学長（学生担当）に提出した。

現状全代会は導入には中立の立場をとっており、今回は賛否両方の意見をまとめた。

現在宿舎では、洗濯機、乾燥機にかかる費用は共益費で出している。学類の中には、賛成、反対をそれぞれ表明しているところもあり、今後の動きが注目される。

恐喝事件
8月以降多発
犯行は深夜に

本学大学院生の男性が8月14日深夜1時20分ごろ、1人で自転車に乗って帰宅していたところ、第一エリアバス停付近で4人組の男から因縁をつけられ、暴行を受けた。金銭的被害は無かった。

関連は不明だが同月に、本学生が4人組の男に暴行を受けるという事件も発生。9月には本学生が2人組に恐喝されるという事件も発生している。いずれも深夜に被害を受けている。本学はポスターを掲示するなど学生に注意を呼び掛けている。

強姦未遂
昼間に発生
犯人は逮捕

本学女子学生が9月2日の昼ごろ、アルバイト先の店で仕事をしていたところ、急に男が近づいてきて衣服の上から体を触られた。

女子学生が抵抗すると男は店から逃走したという。同日、男は強姦未遂の容疑で警察に逮捕された。

たとえ日中であっても絶対に安全とは言い切れない。

新型インフルエンザ
院試では追試も

新型インフルエンザが猛威をふるっている。本学では10月期の大学院入試で、大学はポスターを掲示し、「自分の身は自分で守る」「断り方を練習しておく」などの心掛けを学生に呼び掛けている。不審な団体に勧誘されたら、学生生活課などに相談しよう。

新型インフルエンザ感染などで受験不可能となった志願者に対し、追試を実施する。追試の手続きや、追試を行う専攻、日時などの詳細は、本学HP上に掲載。

宗教勧誘
サークル装い
徐々に勧誘

2学期に入り、宗教団体と思われる不審な団体から勧誘されたとの相談が大学に多数寄せられた。学内や天久保、春日など大学周辺で、サークルやT-ACTを装い、学生に加入を勧める手口だ。

団体は実際にスポーツや社会貢献などの活動を行っており、参加者は徐々に教義を刷り込まれていく。すでに団体に加入した学生も多数いるという。

大学はポスターを掲示し、「自分の身は自分で守る」「断り方を練習しておく」などの心掛けを学生に呼び掛けている。不審な団体に勧誘されたら、学生生活課などに相談しよう。

学生論壇　社会への声

筑波英検の仕組みに疑問

廃止が決定した筑波英検。学生が大学側の求める英語力に到達しているかを全学統一基準で測定するために行われてきたものであったが、社会的に認知されていないことや、単位認定の絶対的な評価尺度としての利用法が疑問視されていることなどを理由に、廃止が決定した。

私は筑波英検の廃止には賛成である。学類によって英語に接する機会も異なれば、勉強をする上での英語の必要性も異なる。そのような状況下で、全学統一の基準を設ける必要はないように感じる。筑波英検があるからといって、学生が皆、英語を勉強するというわけでもない。確かに、ある程度の英語力を身に付けておくことは有意義なことかもしれないが、専門分野が英語とは懸離れている人たちにまで、英語を基準に達するまで勉強させるのは酷である。英語は短期間、集中的に勉強しても力がつくものではない。また、もともと英語の力があった人でも、一カ月でも英語に触れないと、すぐに力が落ちてしまうものである。自分の研究分野と英語が掛け離れている人に、長期間勉強させるような仕組みを設けるのはいかがなものかと思う。

学校側が、学生にある程度の英語力を身に付けてもらいたいということで検定を実施するのであるならば、TOEFLやTOEICといった試験を利用することも有効ではないだろうか。これらの試験であれば、卒業後も結果を残すことが出来、社会的にも認められたものであるので、学生の側の試験に対する意欲も変わってくるのではないだろうか。あるいは、検定に使う英文をそれぞれの学類の専門分野に通じるような内容とし、授業もそれに合わせた形態で行うことも効果的な方法だと思える。自分の興味のある分野であれば、学習意欲も高まり、楽しく、効率的に英語を身に付けることが出来る。

次回もし検定を実施することがあれば、何のためにどの程度の英語力を身に付けてもらいたいのかを明確にし、学生に学習意欲が生じるような検定にしてほしい。（国際問題研究会・大山貴稔＝国総1年）

第35回雙峰祭

一途に筑波、それゆえ筑波

今年のテーマは

第35回雙峰祭 3日間晴天に恵まれる

新企画は新型スタンプラリー

第35回雙峰祭が「一途に筑波、それゆえ筑波」をテーマに、10月10―12日に行われた。新型インフルエンザの影響が懸念されたが、3日間晴天に恵まれ、4万人を超える来場者が足を運んだ。（本紙・西内彩香、野口尚寛、堀木陽子＝人文学類、西川大煕、廣野尚人＝社会学類、加藤茂行＝地球学類、森田聡＝社会工学類）

学内研究

研究室が日ごろの研究成果を発表する学内研究企画が、10―12日に総合研究棟Bなどで行われ、今年は30の団体が参加した。

その中の1つで鬼沢武久教授（知機）の研究室企画、「感性の泉」では、機械に情報を与えると人間の感性に合わせた処理をするという研究が紹介された。人の顔を作るシステムでは、家族の顔を作り楽しむ来場者の姿が見られた。

スタンプラリー

実行委員会による、今年度から始まった企画。電子マネーや本学の学生証などに使われているFelicaを用いて、校内に設置されたポートを巡るスタンプラリーをしてポイントを貯め、景品を獲得する。ラリーをすることでマスコットキャラクターである「ぴぴっとちゃん」と「ぴぴっとちゃん」の物語が展開されてゆく仕組み。DSiや商品券など豪華な景品が用意されており、中でも、オリジナルアイテムであるぴぴっとちゃんとぴぴっとちゃんのエコバッグに人気が集まったようだ。

実行委員らは「見込み以上の参加が見られて嬉しい。今年度はシステムダウンによる不具合が生じたため、来年度からはシステムの安定が課題。景品も工夫していきたい」と、今後の意気込みを語った。

講演会

11、12日の2日間に渡って、1D201教室で講演会が開催された。

11日は東京工業大学世界文明センターフェローの桜井進氏が「雪月花の数学―日本の美と心をつなぐ数“白銀比”―」と題して講演を行った。テレビでも活躍する桜井氏は、日本の美術に見られる白銀比など、数学の魅力を熱く語った。

12日には本学の土井隆義教授（国共）が「血液型ブームと新自由主義―新たな宿命観の時代―」をテーマに講演。

流行の血液型性格診断やケータイ小説を手がかりに、現代社会を生きる我々の生きづらさや不安を説き明かした。

イバライガー

11、12日に、3Eカフェ内の企画で「3！R！メッセージ」と題して、環境問題についてイバライガーが子供たちに講義を行った。温暖化の進んだ未来がどうなってしまうのか、阻止するためにはどうすればよいのかを、アクションや掛け声を交えながら分かりやすく解説した。

環境問題解決の具体策として、ペットボトルキャップのリサイクルを呼び掛けた。

最後にイバライガーのサイン会が行われた。長蛇の列が出来、多くの人がイバライガーと一緒に記念撮影を行った。

市内から親に来た親子連れは「子供と一緒に聞くことで、親も環境問題について考えるきっかけに繋がる。分かりやすい解説でためになった」と語った。

環境問題について説明するイバライガー

芸術祭

今年で第3回目となる芸術祭が、芸術専門学群及び大学院人間総合科学研究科芸術専攻の学生が主体となり雙峰祭の体芸エリアで10日―12日に開かれた。日本画、洋画、彫刻作品の展示を始め、ポストカードやTシャツなどの販売が行われた。

雙峰祭グランプリ

雙峰祭グランプリが12日、UNITEDステージで発表された。この企画は来場者に面白かった企画や印象に残った企画を投票してもらい、各部門で一番票を集めた企画を表彰する。

部門はショップ名人、アカデミック達人、イベント仙人の3つ。そして、総合優秀企画が「総合王者」に輝く。

今年の「総合王者」は松美記念。社会学類主催の恒例行事で、有志達が馬に扮して、ハンデを負いながら松美池の中を競走した。代表の鳥越勝さん（社学3年）は「皆頑張ったから、認められてうれしい。来年も優勝を狙います」と笑顔で語った。

ミス☆キャンパス

「ミス☆キャンパス」が12日の後夜祭の企画としてUNITEDステージで開催された。

「ミス☆キャンパス」は、出場者のタレント性や観客の反応などが審査の対象となっており、クイズやファッションショーなど色々な企画が催された。出場者は全部で11人。ステージ上でさまざまなパフォーマンスを繰り広げ、会場は大いに盛り上がった。

その後、学園祭実行委員長らによる審査の結果、今年度のミスキャンパス、準ミスキャンパスが発表された。ミスキャンパスには佐々木ののかさん（国総1年）、準ミスには西野陽子さん（看護2年）が選ばれた。佐々木さんはステージ上でテレビゲームのキャラクターの物まねを披露し、持ち前の明るさが高く評価された。ミスキャンパスの佐々木さんは「周りの人たちが親身になって応援してくれたおかげ。（受賞したのが）信じられない」と語った。

グランプリ発表後、会場には花火が打ち上げられた。学生らがその余韻に浸っている中、第35回「雙峰祭」は幕を閉じた。

雙峰祭グランプリを受賞した松美記念

三学期制討論

ゲストに副学長を迎える

全代会教育環境委員会による「今、再び問う！三学期制の理念」が雙峰祭初日の10日、1D201教室で開かれた。

清水一彦副学長（教育担当）がゲストとして参加した。討論では「地域、社会に開かれた大学を目指す」という本学の建学理念などに関する討論が行われた。

賛成派が「3学期制は社会人や中高生と夏休みの期間が重なり、公開講座を開く場合は『開かれた大学』を目指すのにふさわしい」と主張した。これに対し反対派は「2学期制でも8月は休みであり、社会に開かれた大学を目指すことは出来る」と主張した。

討論会終了後、清水副学長は「学生の声を反映出来るよう、今後も大学全体の質の向上に繋がる方策を教員と学生が一緒になって議論していきたい」と語った。

学長主催留学生懇談会

外国に対する壁なくす

学長主催の外国人留学生懇談会が、先月21日、第2エリア食堂で開催された。多くの留学生が出席し、食事を囲みながら交流を深めた。ときめき太鼓塾の演奏もあり、留学生らは太鼓や笛のリズムに酔いしれた。

中国からの留学生は「このような会に出るのは初めて。多くの知り合いが出来たし、気になっていた太鼓のパフォーマンスを見られ嬉しい」と語った。また、インドから留学してきているダヤナンダ・シンさん（知機2年）は「いろいろな国の人と文化交流が出来楽しい。これからもっと交流の機会が持てれば」と意欲的に話した。

山田信博学長は「グローバル化が進み、文化的背景からさまざまな問題が起きている。自分たちのやり方が正しいと内向きにならず、外国からも知恵を吸収してほしい。今日の懇談会を外国の友達を作るきっかけにし、外国に対する壁がなくなれば」と語った。

投資学習支援サークル

投資の基礎学ぶ

株やFX（通貨証拠金取引）で一山当てて大金持ちになってやる――誰もが一度は考える野望ではないだろうか。本学にも、投資に関する知識を学び深めようとする学生の集うサークルが存在する。「投資学習支援 Rudder Maker」だ。現在は5人の会員が、毎週金曜日の放課後に集まり、投資に関する熱い議論を交わしている。

昨年度から一般学生団体となった本サークルだが、発足したのは2003年。同時期に話題となった慶應義塾大の投資サークル「あさい」と共に、他大の投資サークルのさきがけ的存在であった。

団体名の「Rudder Maker」とは「船の舵を作る人」という意味だ。「投資という海原へ出て行くための支援をしたい」という想いが込められている。

現在は毎週1人が個人の興味に合わせて投資に関する議題を用意し、議論するといった活動を行っている。特に株の話題が人気だ。議論で得た知識は、個々人での投資に生かされる。現在は、オバマ大統領のグリーンニューディール政策や民主党の太陽光発電の買い取り義務化などを受けて、新エネルギー関連分野に注目している。ただし、関連株が下落しても責任は負いかねるとのこと。

会の雰囲気は、会員が学群1年から修士1年までばらけているにも関わらず、学年の差を感じさせない。フランクな人間関係が、活発な議論を生んでいるようだ。

この他に不定期で「株の寺子屋」を開催している。一般の人に株の知識を教える取り組みで、毎回大盛況だ。以前には慶應義塾大主催の投資対抗戦を早稲田大と本学を加えた3校で行った。

証券口座を持たず、実際に投資活動をせずとも、会に参加し知識を深めることは出来る。会長の久野新太郎さん（物分前期1年）は「投資はさまざまなことが密接に関わっているので、学ぶことで得られる波及効果が大きい」と語る。経済ニュースが分かるようになるなど、投資を学ぶことの魅力は投資そのものに留まらないのだそうだ。

最後に久野さんは「株などの資産は、何もしなくても金を生む。こういうシステムを利用出来る場に参画しないのはもったいない」と投資への想いを話した。「舵」を使うことで、多くの航海者が投資の大海原へと旅立って行くことを期待したい。（本紙・柏雪＝社会工学類）

早期修了プログラム説明会

12月4、5日に開催

社会人のための博士後期課程早期修了プログラム説明会が開かれる。同プログラムは、一定の研究業績や能力を有する社会人を対象に、標準修業年限が3年である博士後期課程を最短1年で修了し、課程博士号を取得させるプログラムである。

12月4日午後6時半―8時に、本学春日キャンパスのメディアユニオン2階情報メディアホールで。12月5日午後1時半―3時に、秋葉原ダイビル15階筑波大学法科大学院ゼミ室で。

参加希望者は、早期修了プログラム事務局まで。なお、当日参加も可能。

問い合わせ＝souki@sie.tsukuba.ac.jp

Who's Who?

小さなゴブリンたちの生みの親

小中 大地 さん（芸術前期2年）

大学病院の作業場で作業中の小中さん

創作活動に苦難の日々も

心の変化で作風新たに

雙蓬祭の企画の1つである芸術祭のパンフレットを手に取っただろうか。このパンフレットのキャラクターをデザインしたのが小中大地さん（芸術前期2年）だ。キャラクターは、筆や彫刻刀など芸術に関わる「モノ」がモチーフだ。

このキャラクターを小中さんは「ゴブリン」と呼んでいる。人間にいたずらをする妖精という意味。「モノ」に宿る妖精を形作るという発想から選んだ言葉だ。モノから連想を受けたその妖精を、普段小中さんは粘土で高さ2―3センチほどの人形にする。仕上げに絵の具を塗ったカラフルなものだ。

初めてゴブリン人形を制作したのは大学3年生の夏休み。小学校の教室を1人1つ使って展示を行う企画で作った。そのときは、黒板消しや鉛筆など、小学校に関わりのあるモノの形をしたゴブリンを展示した。「小学生のころの作風に戻った。大学に入っていろいろな世界を見て、中学、高校時代の、モチーフを忠実に描く作風に限界を感じたせいかな」と、原点に戻って制作に取り組んだ。展示は大好評で、小学生から「ゴブリン博士」と呼ばれて以来、自分のニックネームにしている。「人形を媒体とした現代美術作家にもなれると思い、モチベーションが高かった」と当時を振り返る。

しかし、その後1年間ゴブリン制作を続ける中で、マンネリ感と疲労感から人形制作への疑問を感じるようになった。その結果、1年後の同じ企画では絵を展示。1年前はあれほど楽しかったゴブリン作りが、このころには悩みの種になっていた。「作家としての自分に疑問を感じた」という。ところが、前年のゴブリン人形を知っている子供から、人形の展示をせがまれた。求められるものと作りたいものが違い、そのジレンマから小中さんの苦悩が始まった。

苦悩を抱えたまま大学院へ進学。依頼を受けて、おもちゃのイラストや携帯電話のコンテンツの仕事などを手がけ始めた。それなりにやりがいはあったものの、依頼者の思う通りに作品を仕上げなければならないことに疑問も感じた。あるイラストの仕事を受けたとき、絵のタッチに口出しされ、最終的にイラストレーターから外されたこともあった。悩みは深くなるばかりだった。

ところが最近、変化が起きた。作品づくりの新たな可能性が見えてきたのだ。今月初めまで附属病院で開催していた「ゴブリン博士の病院ゴブリン」という滞在制作プロジェクトでのことである。

小中さんが展示の横で着実にゴブリン博士の現世界は広がってきている。（本紙・牛尾仁実＝社会学類）

聴診器のゴブリン

総合がん診療センター特別講演

菅原文太氏が講演行う

本学附属病院総合がん診療センターが11月29日に主催する特別講演で、俳優の菅原文太氏が「つくば発人生列車」と題した講演を行う。また、「生き方の選択―がん医療からみえてくるもの―」をテーマに菅原氏、赤座英之同センター部長、小嶋修一氏（TBS報道局解説室）が対談を行う。

開場は午後1時半で、講演は午後2時から。参加費は無料だが、事前申し込みが必要。先着順で定員になり次第、応募を締め切る。問い合わせ＝ccc@un.tsukuba.ac.jp（本学附属病院総合がん診療センター　平井、鈴木）

◆菅原文太（すがわら・ぶんた）俳優。1933年生まれ。58年、新東宝より『白線秘密地帯』でデビュー。その後映画の主演作多数『仁義なき戦い』シリーズ、『わたしのグランパ』など。テレビでは NHK大河ドラマ『利家とまつ』などに出演。

第29回つくばマラソン

11月22日に開催

エコシティ第29回つくばマラソンが11月22日に開かれる。主催はつくば市、筑波大学、茨城陸上競技協会、読売新聞社。今年で29回目を迎えるつくばマラソンに、本学は第5回目から協力を続けてきた。本年もスタート地点になるほか、陸上競技場がゴール、表彰式会場となる。

スタートは42・195キロメートルの部が11月22日午前9時半、10キロメートルの部が同日10時20分。出場者の増加に伴い、コースの一部に危険な状況が見られたため今年はコースを変更する。変更されるのはレース前半部約6―13キロの東大通り区間で、今年はその区間を本学構内周回道路から県道藤沢・豊里線を経由して、西大通りに出て北上する。問い合わせ＝03・5166・0287（つくばマラソン事務局）

編集後記

「○○先生の授業なんだけど、プリント持ってる!?」「テストは何日にやるって!?」

学内のあちこちで、単位を取ろうと画策する学生たちの声が聞かれるようになりました。という私もその1人…。もうすぐ2学期末試験です。

でもそれが終われば、短いながらも秋休みがやってきます。友達とディズニーランドにでも行こうかなー！と思ったら、秋休みは本紙12月号の編集期間でした。あー残念（泣）。（編集長＝松本典子・人文3年）

次号は

12月7日（月）

発行予定です

筑波自然図鑑

◇ノハラアザミ◇

撮影地＝兵太郎池付近の林

秋の草原で最も普通に見られるアザミで、乾いた草地や林縁に生える。高さは0・4―1メートルほどで、花は細長い管状花の集合体となっている。ノアザミと混同しがちだが、ノアザミは花期が5―8月であるのに対してノハラアザミは8―10月である。

ノハラアザミを含むアザミは地方変異が非常に多く、100種類以上の固有種が日本に存在している。実は日本を代表する花の1つなのである。

（写真・文＝中泉亮、生資3年、野生動物研究会）

催事

展覧会

◆MC展

本学大学院人間総合研究科博士前期課程芸術専攻の洋画・日本画・版画学生による作品展（MC展）が12月1―6日につくば美術館（つくば市吾妻）で開催される。36人の学生が約45点の作品を展示する。出展する多くの学生は、個展やグループ展などで学外への発表を行うほか全国レベルの公募展に出展するなど対外的に高い評価を得ている。入場無料で、午前9時半―午後5時まで（最終日は午後3時）。問い合わせ＝n.yusuke0529@kzh.bigtobe.ne.jp（中森）

筑波大学出版会 新刊案内

近代中国の書文化

菅野智明 著

近代中国に押し寄せた新しい文化の波は、中国が誇る伝統芸術の「書」にもさまざまな変革をもたらした。美術団体の組織化、近代学校における「書」の導入、技術革新に伴う書の出版事業、収蔵活動やデータベース化―これらの試みは近代型の「グローカリゼーション」ともいうべき側面を持っている。「書」をめぐる新しい動向を多面的に検証し、今後の書文化」の行方を探る画期的な労作。著者は、本学芸術専攻の准教授。購入は、学内の書籍部、全国の書店、Amazonなどで。3360円。

大学会館書籍部ベストセラー

1	思考の整理学　外山滋比古/ちくま文庫
2	終末のフール　伊坂幸太郎/集英社文庫
3	最新最強のSPIクリア問題集　成美堂出版
4	ノルウェイの森（下）　村上春樹/講談社文庫
5	ミシェル・フーコーの講座集成8　ミシェル・フーコー／筑摩書房
6	理系のための英語「キー構文」46　原田豊太郎/講談社ブルーバックス
7	ノルウェイの森（上）　村上春樹/講談社文庫
8	こころ　夏目漱石/新潮文庫
9	本当に頭がよくなる1分間勉強法　石井貴士/中経出版
10	わかりやすく伝える技術　池上彰/講談社現代新書

10月の第1位は外山滋比古の「思考の整理学」。広い視野を持ち、鋭い論理を展開する著者が、ものごとの考え方や整理の仕方を指南する内容となっている。20年前に出版された本だが、「もっと若いときに読んでいれば…」という書店の推薦文がきっかけとなり異例の再流行。10月末にはミリオンセラーを突破した。

催事は、歴史製話会15％オフ、12月27日まで。